

Oracle® Database

Client インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-bit)

部品番号 : B25253-04

2008 年 4 月

Oracle Database Client インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-bit)

部品番号 : B25253-04

原本名 : Oracle Database Client Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Microsoft Windows (32-Bit)

原本部品番号 : B14312-04

原本著者 : Reema Khosla

原本協力者 : Patricia Huey, Janelle Simmons, Punsri Abeywickrema, Phil Choi, Toby Close, Sudip Datta, Alex Keh, Mark Kennedy, Peter LaQuerre, Anu Natarajan, Bharat Paliwal, Sham Rao Pavan, Rajendra Pingte, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Sujatha Tolstoy, Alice Watson

Copyright © 1996, 2008 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性ががあります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vii
表記規則	vii
サポートおよびサービス	viii
1 Oracle Database Client インストールの概要	
インストールの概要	1-2
Windows Vista のユーザー・アカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理	1-3
Oracle Database Client のインストール・タイプ	1-3
2 Oracle Database Client のインストール前の要件	
Oracle Database Client ハードウェア要件	2-2
ハード・ディスク領域の要件	2-2
Oracle Database Client ソフトウェア要件	2-4
Oracle Database Client の一般的なソフトウェア要件	2-4
Instant Client Light の言語およびキャラクタ・セットの要件	2-6
Oracle Database Client ハードウェアおよびソフトウェアの認定	2-7
Windows Telnet サービスのサポート	2-7
Windows ターミナルサービスおよびリモートデスクトップのサポート	2-8
Windows XP および Windows Vista でサポートされているコンポーネント	2-8
Web Browser Support	2-9
Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件	2-9
3 Oracle Database Client のインストール	
Oracle Database Client のインストール前の考慮事項	3-2
Windows Vista でのインストールの考慮事項	3-2
サイレントまたは非対話モードでの Oracle Database Client のインストール	3-2
Oracle ベース・ディレクトリの作成	3-3
複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール	3-3
既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール	3-3
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-4
リモートの DVD デバイスからのインストール	3-4
手順 1: リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有	3-4
手順 2: ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング	3-4

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール	3-5
リモート・コンピュータでのハード・ドライブからのインストール	3-5
リモート DVD ドライブからのリモート・コンピュータへのインストール	3-6
Oracle Technology Network の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード	3-6
ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー	3-7
Oracle Database Client ソフトウェアのインストール	3-7
Oracle Database Client のインストールのガイドライン	3-7
Oracle Database Client のインストールの手順	3-8

4 Oracle Database Client のインストール後の作業

インストール後の必須作業	4-2
パッチのダウンロードとインストール	4-2
Instant Client の更新	4-3
インストール後の推奨作業	4-3
Instant Client Light の構成	4-3
Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続	4-4
Instant Client または Instant Client Light の Oracle Database への接続	4-5
簡易接続ネーミング・メソッドを使用した接続の指定	4-5
tnsnames.ora ファイルの構成による接続の指定	4-5
空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定	4-6
ユーザー・アカウントの設定	4-6
Oracle Enterprise Manager Java Console の実行	4-7
Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザーへの追加権限の付与	4-7
Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) での Oracle9i の言語および定義ファイルの使用	4-8
Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成	4-8
製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成	4-9

5 Oracle Database Client ソフトウェアの削除

Windows での Oracle サービスの停止	5-2
Oracle Universal Installer を使用した Oracle Database Client の削除	5-2
Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン	5-2
Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する手順	5-3
残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法	5-4
Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除	5-4
Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除	5-4
すべての Oracle レジストリ・キーの削除	5-5
PATH 環境変数のパスの更新	5-6
「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除	5-6
Oracle Database Client ディレクトリの削除	5-6

A Java Access Bridge のインストール

概要	A-2
JRE 1.4.2 の設定	A-2
インストール済の Oracle コンポーネントの設定	A-2
Java Access Bridge のインストール	A-2
Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成	A-3

B	レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Client のインストール	
	レスポンス・ファイルの働き	B-2
	サイレント・モードまたは非対話モードを使用する理由	B-2
	レスポンス・ファイルの一般的な使用手順	B-3
	レスポンス・ファイルの準備	B-3
	レスポンス・ファイル・テンプレートの編集	B-3
	レスポンス・ファイルの記録	B-4
	レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行	B-5
C	Oracle Database Client グローバリゼーション・サポートの構成	
	異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用	C-2
	様々な言語での Oracle Universal Installer の実行	C-2
	異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	C-2
	NLS_LANG パラメータ	C-3
	一般に使用される NLS_LANG の値	C-4
	MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定	C-6
D	Oracle Database Client インストールのトラブルシューティング	
	要件の確認	D-2
	インストール・エラーが発生した場合の操作	D-2
	インストール・セッションのログの確認	D-2
	サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理	D-3
	コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング	D-3
	コンフィギュレーション・アシスタントの障害	D-3
	致命的エラー	D-4
	インストール失敗後のクリーン・アップ	D-4

用語集

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database Client for Microsoft Windows (32-bit) のインストールおよび構成の手順について説明します。このマニュアルでは、Windows 2000、Windows 2003、Windows Server 2003 リリース 2、Windows XP および Windows Vista オペレーティング・システムにインストールした Oracle Database Client for Microsoft Windows (32-bit) ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

対象読者

『Oracle Database Client インストール・ガイド』は、Oracle Database Client をインストールするユーザーを対象としています。

このマニュアルを使用するには、次の必要があります。

- サポートされている Microsoft Windows オペレーティング・システムが、コンピュータにインストールされ、テスト済であること
- Oracle Database Client をインストールするコンピュータでの管理権限
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念に精通していること

関連項目: 『Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド』
(デフォルトの設定を使用したクイック・インストールを実行する場合)

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database リリース・ノート』
- 『Oracle Database インストール・ガイド』
- 『Oracle Enterprise Manager Grid Control インストールおよび基本構成』
- 『Oracle Database アップグレード・ガイド』
- 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』
- 『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』

このマニュアル内の多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

このマニュアルの本文では、次の表記規則を使用しています。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連付けられた Graphical User Interface 要素、または本文や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるブレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル・コード、画面上に表示されるテキストまたはユーザーが入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database Client インストールの概要

この章では、実行可能な Oracle Database Client の様々なインストール・タイプと、ソフトウェアのインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

- [インストールの概要](#)
- [Windows Vista のユーザー・アカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理](#)
- [Oracle Database Client のインストール・タイプ](#)

インストールの概要

Oracle Database Client のインストール・プロセスは、次の 5 段階で構成されます。

1. **リリース・ノートの参照**: インストールを開始する前に、Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のリリース・ノート参照してください。このリリース・ノートには、プラットフォーム固有のドキュメントが用意されています。最新バージョンのリリース・ノートは、次の Oracle Technology Network の Web サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/documentation>

2. **インストールの計画**: この概要の章では、Oracle Database Client のインストールに使用できるインストール・タイプと、開始前に考慮が必要な問題について説明します。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』の付録 A 「インストールに関するよくある質問」も参照してください。この付録には、サイトの要件に応じた Oracle 製品の最適なインストール方法についてのアドバイスが記載されています。

3. **インストール前の作業の完了**: 第 2 章では、Oracle Database Client をインストールする前に完了する必要があるインストール前の作業について説明します。

4. **ソフトウェアのインストール**: Oracle Database Client をインストールするには、次の項を使用します。

- 第 3 章では、Oracle Universal Installer (OUI) の GUI を使用して Oracle Database Client をインストールする方法について説明します。
- 付録 B では、レスポンス・ファイルを使用してサイレントまたは非対話型インストールを実行する方法について説明します。
- C-2 ページの「異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用」では、異なる言語を使用した Oracle コンポーネントのインストールおよび使用方法について説明します。
- 付録 A では、Oracle コンポーネントでのスクリーン・リーダーの使用を可能にする Java Access Bridge のインストール方法を説明します。
- 付録 D では、インストールで問題が発生した場合のトラブルシューティングに関するアドバイスを提供します。
- 第 5 章では、Oracle Database Client の削除方法を説明します。

5. **インストール後の作業の完了**: インストール後の作業を完了するには、次の項を使用します。

- 第 4 章では、インストール後の推奨作業および必須作業について説明します。
- 付録 C では、グローバリゼーション・サポートについて説明します。

Windows Vista のユーザー・アカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理

信頼できるアプリケーションのみをコンピュータ上で実行するために、Windows Vista ではユーザー・アカウント制御が提供されています。このセキュリティ機能を有効にすると、設定次第で Oracle Database Client をインストールする際に Oracle Universal Installer から同意や認証情報を要求されます。適宜、同意や Windows の Administrator の認証情報の入力を行います。

Administration Assistant、Net コンフィギュレーション・アシスタント、および OPatch のようなオラクル社の一部ツールを使用したり、Oracle ホーム内のディレクトリに書き込みを行うツールやアプリケーションを実行するには Administrator 権限が必要になります。ユーザーアカウント制御を有効にし、ローカルの Administrator としてログインすると、これらの各コマンドを通常の方法で正常に実行できます。ただし Administrator グループのメンバーとしてログインする場合は、Windows の Administrator 権限でこれらのタスクを明示的に呼び出す必要があります。詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の Windows Vista でのデータベース・ツールの起動に関する項を参照してください。

Windows の Administrator 権限で Windows ショートカットを実行する手順：

1. 「スタート」ボタンをクリックします。
2. 「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」を選択します。
3. コマンド名または実行するアプリケーションを右クリックして「Run as administrator」を選択します。

Windows の Administrator 権限でコマンド・プロンプト・ウィンドウを起動する手順：

1. Windows Vista のデスクトップ上にコマンド・プロンプト・ウィンドウのショートカットを作成します。デスクトップにショートカットのアイコンが表示されます。
2. 新規作成したショートカットのアイコンを右クリックして「Run as administrator」を指定します。

ウィンドウをオープンすると、タイトル・バーには「Administrator: コマンドプロンプト」と表示されます。このウィンドウ内で実行するコマンドは Administrator 権限で実行されます。

Oracle Database Client のインストール・タイプ

Oracle Database Client のインストール時には、次のインストール・タイプのいずれかを選択できます。

- **InstantClient:** Instant Client 機能を使用する Oracle Call Interface アプリケーションに必要な共有ライブラリのみをインストールします。このインストール・タイプは、他の Oracle Database Client インストール・タイプよりディスク領域が少なくてすみす。
- 「InstantClient」インストールには、Instant Client Light が含まれます。アプリケーションで米語のみのエラー・メッセージが生成される場合、このバージョンの Instant Client を使用できます。Instant Client Light を使用する利点は、通常の Instant Client よりもフットプリントがはるかに小さいことです。そのため、アプリケーションで使用するメモリーが少なくてすみす。
- **管理者:** アプリケーションでローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle データベースに接続できます。Oracle データベースの管理に使用するツールを提供します。
 - **ランタイム:** アプリケーションでローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle データベースに接続できます。
 - **カスタム:** 「管理者」および「ランタイム」コンポーネントのリストから個別のコンポーネントを選択できます。

Oracle Database Client のインストール前の要件

この章では、Oracle Database Client 製品をインストールする前に完了しておく必要がある作業について説明します。

- [Oracle Database Client ハードウェア要件](#)
- [Oracle Database Client ソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database Client ハードウェアおよびソフトウェアの認定](#)
- [Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件](#)

Oracle Database Client ハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle Database Client の必須ハードウェア・コンポーネントを示します。

表 2-1 ハードウェア要件

要件	最小値
物理メモリー (RAM)	256MB 以上、512MB 推奨 Windows Vista の場合、要件は 512MB 以上
仮想メモリー	RAM の 2 倍
ハード・ディスク領域	合計 216 ~ 738MB (詳細は表 2-2 を参照)
ビデオ・アダプタ	256 色
プロセッサ	550MHz 以上 Windows Vista の場合、要件は 800MHz 以上

ハード・ディスク領域の要件

この項では、NT File System (NTFS) のファイル・システムを使用する Windows プラットフォームのシステム要件を示します。FAT32 領域要件はわずかに大きくなります。Oracle コンポーネントは、NTFS にインストールすることをお勧めします。

この項に記載されている NTFS システム要件は、Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウで報告されるハード・ディスク値よりも正確です。「サマリー」ウィンドウには、データベースの作成に必要な領域、またはハード・ドライブ上で展開される圧縮ファイルのサイズは表示されません。

Oracle Database Client コンポーネントのハード・ディスク要件には、Java Runtime Environment (JRE) と Oracle Universal Installer を、オペレーティング・システムがインストールされているパーティションにインストールするために必要な領域が含まれています。十分な領域がない場合は、インストールが失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

表 2-2 に、NTFS の領域要件を示します。

表 2-2 NTFS のディスク領域要件

インストール・タイプ	TEMP 領域	SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle\Inventory	Oracle ホーム	合計
Instant Client	100MB	0.08MB	115MB	216MB
管理者	100MB	0.75MB	637MB	738MB
ランタイム	100MB	0.33MB	273MB	374MB
カスタム (全コンポーネントをインストール)	100MB	0.75MB *	532MB *	633MB *

* このサイズは、選択されたインストール・コンポーネントによって異なります。

注意： Instant Client の Instant Client Light コンポーネントのみを構成する場合、関連ファイルの格納には 30 ~ 32MB のディスク領域が必要です。詳細は、4-3 ページの「Instant Client Light の構成」を参照してください。

関連項目：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の NTFS ファイル・システムと Windows レジストリの権限に関する項

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. 物理 RAM サイズを確認します。たとえば、Windows 2003 を使用するコンピュータの場合、Windows の「コントロールパネル」の「システム」を開き、「全般」タブを選択します。システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、先に進む前にメモリーを増設する必要があります。
2. 構成済の仮想メモリーのサイズ（ページング・ファイル・サイズ）を確認します。たとえば、Windows 2003 を使用するコンピュータの場合、「コントロールパネル」の「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「パフォーマンス」セクションの「設定」をクリックします。次に、「詳細」タブを選択します。仮想メモリーは「仮想メモリー」セクションにリストされています。

追加の仮想領域を構成する方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

3. システムの空きディスク領域のサイズを確認します。たとえば、Windows 2003 を使用するコンピュータの場合、「マイ コンピュータ」を開き、Oracle ソフトウェアをインストールするドライブを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
4. temp ディレクトリで使用可能なディスク領域のサイズを確認します。これは、空きディスク領域全体のサイズから、インストールされる Oracle ソフトウェアに必要なサイズを引いた値に相当します。

temp ディレクトリで使用可能なディスク領域が 100MB 未満の場合は、まず不要なファイルをすべて削除します。それでも temp ディスク領域が 100MB 未満の場合は、TEMP または TMP 環境変数が別のハード・ドライブを指すように設定します。たとえば、Windows 2003 を使用するコンピュータの場合、「コントロールパネル」の「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。

Oracle Database Client ソフトウェア要件

この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client](#) の一般的なソフトウェア要件
- [Instant Client Light](#) の言語およびキャラクタ・セットの要件

Oracle Database Client の一般的なソフトウェア要件

表 2-3 に、Oracle Database Client のソフトウェア要件を示します。

表 2-3 ソフトウェア要件

要件	説明
システム・アーキテクチャ	<p>プロセッサ: Intel (x86)、AMD64 および Intel EM64T</p> <p>注意: Oracle は、32 ビット (x86)、64 ビット (Itanium) および 64 ビット (x64) の各バージョンの Oracle Database for Windows を提供しています。32 ビットのデータベース・バージョンは、このインストール・ガイドで説明しているもので、x86 または x64 ハードウェア上の 32 ビット・バージョンの Windows で動作します。Oracle は 64 ビット Windows (x64) 上での 32 ビット Oracle Database Client に対して認定を提供しています。詳細は、次の OracleMetaLink のサイトを参照してください。</p> <p>https://metalink.oracle.com</p>
オペレーティング・システム	<p>Oracle Database for Windows は、次のオペレーティング・システム上でサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows 2000 (Service Pack 1 以降)。Terminal Services および Microsoft Windows 2000 MultiLanguage Edition (MLE) を含む全エディションがサポートされます。 ■ Windows Server 2003 - 全エディション ■ Windows Server 2003 リリース 2 ■ Windows XP Professional ■ Windows Vista Business、Enterprise および Ultimate の各エディション <p>Windows NT はサポートされていません。</p> <p>Windows Multilingual User Interface Pack は、Windows Server2003、Windows XP Professional および Windows Vista 上でサポートされています。</p>

表 2-3 ソフトウェア要件 (続き)

要件	説明
コンパイラ	<p>Pro*Cobol はテスト済で、次の 2 つのコンパイラで動作が確認されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ACUCOBOL-GT バージョン 6.2 ■ Micro Focus Net Express 4.0 (リリース時に Windows Vista 上では使用不可) <p>Object Oriented COBOL (OOCOBOL) の仕様はサポートされていません。</p> <p>次のコンポーネントは、Microsoft Visual C++ .NET 2002 7.0 および Microsoft Visual C++ .NET 2003 7.1 コンパイラでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle C++ Call Interface ■ Oracle Call Interface ■ GNU Compiler Collection (リリース時に Windows Vista 上では使用不可) ■ 外部コールアウト ■ PL/SQL のネイティブ・コンパイル ■ XDK <p>注意: Microsoft Visual C++ .NET 2005 8.0 で Oracle C++ Call Interface を使用するには、次の Oracle Technology Network から互換性のある DLL をダウンロードします。</p> <p>http://www.oracle.com/technology/tech/oci/occi/occidownloads.html</p> <p>GNU Compiler Collection をプライマリ・コンパイラとして使用する場合は、プライマリ・コンパイラの構成手順について、『Oracle Database インストレーション・ガイド』を参照してください。</p>
ネットワーク・プロトコル	<p>Oracle Net Foundation レイヤーでは、Oracle protocol support を使用して、次の業界標準ネットワーク・プロトコルと通信します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ TCP/IP ■ SSL を使用する TCP/IP ■ Named Pipes

関連項目:

- 2-8 ページの「Windows ターミナル サービスおよびリモートデスクトップのサポート」
- 2-8 ページの「Windows XP および Windows Vista でサポートされているコンポーネント」

Instant Client Light の言語およびキャラクタ・セットの要件

Instant Client Light を使用する場合は、前述の項で説明した要件の他に、アプリケーションで次の言語とキャラクタ・セットを使用する必要があります。

- **言語:** アメリカ英語
- **地域:** Oracle でサポートされる地域
- **キャラクタ・セット:**
 - シングルバイト
 - * US7ASCII
 - * WE8DEC
 - Unicode
 - * UTF8
 - * AL16UTF16
 - * AL32UTF8

言語、地域、キャラクタ・セットは、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOME_ID\NLS_LANG` サブキーの下レジストリに保存されている `NLS_LANG` パラメータで決まります。ここで `ID` は、Oracle ホームを示す一意の番号です。

注意: AL32UTF8 は、XMLType データに適した Oracle Database キャラクタ・セットです。これは、有効なすべての XML 文字をサポートする、IANA に登録された標準 UTF-8 エンコーディングに相当します。

Oracle Database データベース・キャラクタ・セット UTF8 (ハイフンなし) を、データベース・キャラクタ・セット AL32UTF8 またはキャラクタ・エンコーディング UTF-8 と混同しないでください。データベース・キャラクタ・セット UTF8 は、AL32UTF8 に置き換えられています。XML データには UTF8 を使用しないでください。UTF8 では、Unicode バージョン 3.1 以前のみがサポートされます。したがって、有効な XML 文字の一部がサポートされません。AL32UTF8 にはこうした制限はありません。

データベース・キャラクタ・セット UTF8 を XML データに使用すると、致命的エラーが発生したり、セキュリティに悪影響が及ぶ可能性があります。データベース・キャラクタ・セットでサポートされていない文字が入力ドキュメント要素名に含まれる場合、置換文字 (通常は「?」) が代用されます。これにより解析が終了し、例外が発生します。

関連項目: `NLS_LANG` の詳細は、付録 C 「Oracle Database Client グローバリゼーション・サポートの構成」を参照してください。

Oracle Database Client ハードウェアおよびソフトウェアの認定

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが認定されている場合があるため、Oracle MetaLink の Web サイトを確認してください。この Web サイトでは、互換性のあるクライアントおよびデータベースのリリース、パッチ、および不具合の回避策情報も提供しています。次の URL で参照できます。

<https://metalink.oracle.com/>

Oracle MetaLink を使用するには、オンラインでの登録が必要です。ログイン後に、左側の列から「**Certify & Availability**」を選択します。「**Product Lifecycle**」ページで、「**Certifications**」ボタンを選択します。その他の「**Product Lifecycle**」オプションには、「**Product Availability**」、「**Desupport Notices**」および「**Alerts**」が含まれます。

以降の項では、次の要件を示します。

- **Windows Telnet サービスのサポート**
- **Windows ターミナルサービスおよびリモートデスクトップのサポート**
- **Windows XP および Windows Vista でサポートされているコンポーネント**
- **Web Browser Support**

Windows Telnet サービスのサポート

Windows には、Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログインし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用して、sqlplus、sqlldr、import および export などのデータベース・コマンドライン・ユーティリティがサポートされていますが、Oracle Universal Installer および Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントなどのデータベース GUI ツールはサポートされていません。

関連項目： Windows オペレーティング・システムの詳細情報は、次の Microsoft の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/>

注意： Windows の「サービス」ユーティリティで Telnet サービスが起動していることを確認してください。

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では、サポートされているすべての Windows オペレーティング・システム上でのターミナル サービスを介した Oracle Database Client のインストール、構成、実行がサポートされます。Terminal Server を介したインストールで問題が発生した場合は、(mstsc/console を使用して) サーバーのターミナル サービス コンソール セッションに接続することをお勧めします。

Windows 2000 の場合、Oracle では、リモートのターミナル サービス クライアントからの Oracle Database Client のインストール、構成および実行がサポートされます。Windows XP および Windows Vista の場合、リモート デスクトップを使用できるのはシングル ユーザー モードの場合のみです。

関連項目：

- Terminal Server の詳細は、次の URL の Microsoft のホームページを参照してください。
<http://www.microsoft.com/>
- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、Oracle MetaLink Web サイトを参照してください。
<https://metalink.oracle.com/>

Windows XP および Windows Vista でサポートされているコンポーネント

すべての Oracle Database コンポーネントは、次のコンポーネントを除いて Windows XP および Windows Vista 上でサポートされています。

- DCE Adapter Support
- Entrust PKI Support
- nCipher Accelerator Support
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server は、Windows Vista 上の Oracle Database ではサポートされていません。結果として、Oracle Services for Microsoft Transaction Server を使用して Microsoft Distributed Transaction Coordinator (MSDTC) の統合されたトランザクションを利用する Windows Vista 上のすべての Oracle Windows データ・アクセス・ドライバを、これらの統合されたトランザクションには関連付けることはできません。これらのデータ・アクセス・ドライバには、.NET、Oracle Provider for OLE DB、Oracle Objects for OLE および ODBC が含まれます。
- Oracle Fail Safe Manager Console は、Windows XP 上ではサポートされていますが、Windows Vista 上ではサポートされていません。

Windows Vista をサポートしている追加コンポーネント

Oracle Data Provider for .NET のリリース 10.2.0.2.20 以上および Oracle Developer Tools for Visual Studio .NET のリリース 10.2.0.2.20 以上は、Oracle Data Access コンポーネント (ODAC) 10.2.0.2.21 を初めて使用する Microsoft Vista で認定されます。Oracle Data Access コンポーネントでは、これらの製品が単一のインストールにバンドルされ、次の Oracle Technology Network の Web サイトからダウンロードして取得できます。

<http://www.oracle.com/technology/software/tech/windows/odpnet/index.html>

これらの製品は、.NET Framework 2.0 および 3.0、および Microsoft Visual Studio 2005 のユーザーにサポートを提供しています。Oracle Data Provider for .NET for .NET Framework 1.x は、Oracle Database Client および Server のインストールによって、すでに含まれています。

注意： この Oracle Data Access コンポーネントのリリース 10.2.0.2.21 を Windows Vista 上にインストールする場合、このバンドルから Oracle Universal Installer を起動しないでください。かわりに、10.2.0.3 Client media for Windows Vista を使用してすでにインストールした Oracle Universal Installer を使用します。

Web Browser Support

次の Web ブラウザは、iSQL*Plus および Oracle Enterprise Manager Database Control でサポートされています。

- Netscape Navigator 7.2 以降
- Microsoft Internet Explorer 6.0 (Windows Vista の場合は Microsoft Internet Explorer 7.0)
- Mozilla バージョン 1.7 以降
- Safari 1.2
- Firefox 1.0.4

Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件

Oracle Database には、Microsoft 管理コンソール (MMC) 用のいくつかのスナップインが付属しています。これらのスナップインには、バージョン 1.2 以降の MMC が必要です。

Oracle スナップインをインストールする前に、Internet Explorer バージョン 6.0 (IE 6.0) 以上をインストールします。IE 6.0 をインストールする前に Oracle スナップインをインストールした場合は、Oracle スナップインを再インストールします。

次のコンポーネントは、Oracle スナップイン・コンポーネントに依存します。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor

注意： Oracle Administration Assistant for Windows をインストールすると、各 Oracle スナップイン・コンポーネントが自動的にインストールされます。

次の Web サイトから、Microsoft 管理コンソール (MMC) アドオンをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/>

Oracle Database Client のインストール

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client のインストール前の考慮事項](#)
- [インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)
- [Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)

Oracle Database Client のインストール前の考慮事項

Oracle Database Client ソフトウェアは、DVD および Oracle Technology Network (OTN) の Web サイトから入手できます。ほとんどの場合は、Oracle Universal Installer の Graphical User Interface (GUI) を使用してソフトウェアをインストールします。ただし、GUI を使用せずに Oracle Universal Installer を使用してレスポンス・ファイルを使用したサイレントまたは非対話型インストールを完了することもできます。

注意： Windows Vista では、コマンド・プロンプトで Administrator 権限が必要です。

関連項目： [「Windows Vista のユーザー・アカウント制御を使用したユーザーアカウントの管理」](#)

インストールを開始する前に第 1 章「[Oracle Database Client インストールの概要](#)」の内容を確認し、第 2 章「[Oracle Database Client のインストール前の要件](#)」に記載されている作業を完了してください。

続いて、次の問題を検討します。

- [Windows Vista でのインストールの考慮事項](#)
- [サイレントまたは非対話モードでの Oracle Database Client のインストール](#)
- [Oracle ベース・ディレクトリの作成](#)
- [複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール](#)
- [既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール](#)

Windows Vista でのインストールの考慮事項

Windows Vista でのインストールの考慮事項は次のとおりです。

- Administrator 権限でコマンド・プロンプトを開きます。
- Windows Vista で使用可能な別のインストール・メディアを使用します。

サイレントまたは非対話モードでの Oracle Database Client のインストール

複数の Oracle Database Client インストールを実行する必要がある場合、レスポンス・ファイルを使用したサイレントまたは非対話モードを使用します。これらのモードでは、各コンピュータで、レスポンス・ファイルを使用してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、通常 Oracle Universal Installer の GUI ダイアログ・ボックスに入力する設定を含むテキスト・ファイルです。この方法により、各コンピュータに対し類似した設定を使用して、複数インストールを簡単に実行できます。

関連項目： 非対話型インストールの実行方法については、[付録 B 「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Client のインストール」](#) を参照してください。

Oracle ベース・ディレクトリの作成

Oracle Database Client を他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータにインストールする場合、Oracle Universal Installer により Oracle ベース・ディレクトリが作成されます。Oracle ソフトウェアがすでにインストールされている場合は、1 つ以上の Oracle ベース・ディレクトリがすでに存在します。後者の場合、Oracle Universal Installer で Oracle Database Client をインストールする Oracle ベース・ディレクトリを選択できます。

インストール前に Oracle ベース・ディレクトリを作成する必要はありませんが、必要ならば作成することもできます。

注意： システムに他の Oracle ベース・ディレクトリが存在する場合にも、新規 Oracle ベース・ディレクトリを作成するように選択できます。

複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール

すべての Oracle コンポーネントを同じコンピュータ上の複数の Oracle ホームにインストールできます。ただし、一部のコンポーネントは、一度に 1 つのアクティブ・インスタンスしかサポートできません。つまり、現行（最新）のインストールは、前のインストールを非アクティブにします。これらのコンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
- Oracle Objects for OLE
- Oracle Provider for OLE DB

既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール

Oracle Database Client は、新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。コンピュータに他の Oracle ソフトウェアがインストールされているかどうかに関係なく、Oracle Universal Installer により、Oracle ホーム・ディレクトリを作成するように要求されます。Oracle Database Client のあるリリースから別のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリには、製品をインストールできません。たとえば、既存の Oracle9i の Oracle ホーム・ディレクトリには Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) ソフトウェアをインストールできません。このリリースを以前の Oracle リリースのソフトウェアがインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしようとすると、失敗します。

このリリースは、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールするかぎり、同じシステムに複数回インストールできます。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database Client ソフトウェアは DVD で配布されますが、Oracle Technology Network (OTN) の Web サイトからもダウンロードできます。次のシナリオを使用して、Oracle Database Client にアクセスしインストールできます。

- リモートの DVD デバイスからのインストール
- リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール
- Oracle Technology Network の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード
- ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー

リモートの DVD デバイスからのインストール

Oracle Database Client をインストールするコンピュータに DVD ドライブがない場合、リモートの DVD ドライブからインストールを実行できます。次の手順を完了する必要があります。

- **手順 1:** リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有
- **手順 2:** ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング

手順 1: リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有

使用するリモートの DVD ドライブで共有アクセスを許可する必要があります。これを設定するには、DVD ドライブのあるリモート・コンピュータで、次の手順を実行します。

1. Administrator ユーザーとしてリモート・コンピュータにログインします。
2. Windows のエクスプローラを起動します。
3. DVD のドライブ文字を右クリックして、「共有」(または「共有とセキュリティ」)を選択します。
4. 「共有」タブをクリックし、次を実行します。
 - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
 - b. 「共有名」に、dvd などの共有名を入力します。この名前は、ローカル・コンピュータで DVD ドライブをマッピングするときに使用します。次の手順の、手順 1 の d を参照してください。
 - c. 「アクセス許可」をクリックします。Oracle Database をインストールするためにドライブにアクセスするユーザーには、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。
 - d. 終了したら、「OK」をクリックします。
5. Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) というラベルの DVD を DVD ドライブに挿入します。

手順 2: ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング

リモートの DVD ドライブをマッピングし、マッピングされたドライブから Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順をローカル・コンピュータで実行します。

1. リモートの DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows のエクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」メニューから「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択し、「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログを表示します。
 - c. リモートの DVD ドライブのドライブ文字を選択します。

- d. 「フォルダ」に、リモートの DVD ドライブの場所を次の書式を使用して入力します。

¥¥remote_hostname¥share_name

項目の説明：

- remote_hostname は、DVD ドライブがあるリモート・コンピュータの名前です。
- share_name は、前述の手順の、手順 4 で入力した共有名です。たとえば、次のようになります。

¥¥computer2¥dvd

- e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合は、「異なるユーザー名」をクリックして、ユーザー名を入力します。

- f. 「完了」をクリックします。

2. マッピングされた DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。
3. 3-7 ページの「Oracle Database Client ソフトウェアのインストール」に進んでください。

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール

リモート・コンピュータに Oracle Database Client をインストールし実行しようとしている（つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、リモート・コンピュータで Oracle Database Client コンポーネントを実行する）が、そのコンピュータに物理的にアクセスできない場合、リモート・コンピュータで VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアを実行していれば、インストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアを実行する必要があります。

次の 2 通りの方法のいずれかによって、リモート・コンピュータに Oracle Database Client をインストールできます。

- Oracle Database Client の DVD のコンテンツをハード・ドライブにコピーした場合、ハード・ドライブからインストールできます。
- DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、DVD からインストールできます。

リモート・コンピュータでのハード・ドライブからのインストール

Oracle Database Client の DVD のコンテンツをハード・ドライブにコピーした場合、ハード・ドライブからインストールできます。

完了する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータにインストールされており、実行中であることを確認します。
2. Oracle Database Client の DVD の内容が含まれているハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを実行するには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。
5. 3-7 ページの「Oracle Database Client ソフトウェアのインストール」に進んでください。

リモート DVD ドライブからのリモート・コンピュータへのインストール

DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、DVD からインストールできます。

完了する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータにインストールされており、実行中であることを確認します。
2. ローカル・コンピュータで、DVD ドライブを共有します。
リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 DVD ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを実行するには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
これらの手順は、3-4 ページの「[リモートの DVD デバイスからのインストール](#)」に記載されています。
3. リモート・アクセス・ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 DVD ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。
4. 3-7 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

Oracle Technology Network の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード

インストール・ファイルは、Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードして、ハード・ディスク上で展開できます。

1. ブラウザを使用して、次の URL にある Oracle Technology Network のソフトウェア・ダウンロード・ページにアクセスします。
`http://www.oracle.com/technology/software/`
2. インストールする製品のそれぞれのダウンロード・ページにナビゲートします。
3. ダウンロード・ページで、各必須ファイルのサイズを合計して必要なディスク領域を確認します。ファイル・サイズは、ファイル名の隣に表示されます。
4. ファイルの格納および展開用に、十分な空き領域のあるファイル・システムを選択します。ほとんどの場合、使用可能なディスク領域には、全圧縮ファイルの合計サイズの 2 倍以上のサイズが必要です。
5. 選択したファイル・システム上で、インストール・ディレクトリを保持するために、OraDBClient10g などの親ディレクトリをインストールする製品ごとに作成します。
6. すべてのインストール・ファイルを、作成したディレクトリにダウンロードします。
7. ダウンロードしたファイルのサイズが、Oracle Technology Network 上の対応するファイルと一致することを確認します。
8. 作成した各ディレクトリで、ファイルを展開します。

必須インストール・ファイルを展開したら、3-7 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」を参照してください。

ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー

メディアの内容をハード・ディスクにコピーする手順は、次のとおりです。

1. ハード・ドライブにインストール・ファイルのディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
d:\install\client
```

2. インストール・メディアの内容を作成したディレクトリにコピーします。

必須インストール・ファイルをコピーしたら、3-7 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」を参照してください。

Oracle Database Client ソフトウェアのインストール

この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client のインストールのガイドライン](#)
- [Oracle Database Client のインストールの手順](#)

Oracle Database Client のインストールのガイドライン

ほとんどの場合は、Oracle Universal Installer の Graphical User Interface (GUI) を使用して Oracle Database Client をインストールします。ただし、GUI を使用せずに Oracle Universal Installer を使用してレスポンス・ファイルを使用したサイレントまたは非対話型インストールを完了することもできます。この方法は、複数の Oracle Database Client インストールを実行する必要がある場合に特に役立ちます。

Oracle Database Client をインストールするときは、次のガイドラインに従います。

関連項目：サイレントまたは非対話型インストールの詳細は、[付録 B 「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Client のインストール」](#)を参照してください。

- このリリースのコンポーネントをインストールする際に、旧リリースの Oracle 製品の Oracle Universal Installer を使用しないでください。
- サポートされているすべての Windows プラットフォームでは、Oracle Database Client のインストールに同じインストール・メディアを使用します。
- Oracle Database Client がすでにインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle ソフトウェアを再インストールする場合は、開始する前に、インストール済みのコンポーネントをすべて再インストールする必要があります。
- オラクル社カスタマ・サポート・センターで提供されているパッチを使用する場合を除き、Java Runtime Environment (JRE) を変更しないでください。Oracle Universal Installer により、オラクル社が提供するバージョンの JRE が自動的にインストールされます。Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle Assistant の実行には、このバージョンが必要です。
- インストール中にエラーが発生した場合は、「ヘルプ」をクリックするか、[付録 D 「Oracle Database Client インストールのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

Oracle Database Client のインストールの手順

Oracle Database Client をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Administrators グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログオンします。
プライマリ ドメイン コントローラ (PDC) またはバックアップドメイン コントローラ (BDC) にインストールする場合、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. Oracle Database インストール・メディアを挿入して client ディレクトリにナビゲートします。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。
サポートされているすべての Windows プラットフォームでは、Oracle Database のインストールに同じインストール・メディアを使用します。
3. setup.exe をダブルクリックして Oracle Universal Installer を起動します。
4. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
5. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、インストール・タイプを「InstantClient」、**「管理者」**、**「ランタイム」**または**「カスタム」**から選択し、「次へ」をクリックします。

関連項目： インストール・タイプの詳細は、1-3 ページの「[Oracle Database Client のインストール・タイプ](#)」を参照してください。

6. 「ホームの詳細の指定」ウィンドウで、次のようにします。
 - **名前：** Oracle ホームの名前を入力します。
既存の Oracle コンポーネントがインストールされているコンピュータにインストールする場合であっても、Oracle Database Client を新規の Oracle ホームにインストールします。
Oracle9i 以下のソフトウェアが入っている既存の Oracle ホームには、Oracle Database Client 10g リリース 2 (10.2) ソフトウェアをインストールしないでください。Oracle Database Client は、同じホームに Oracle Database がインストールされていないかぎり、Oracle Database Client 10g リリース 1 (10.1) を含む既存の Oracle ホームにインストールできます。
 - **パス：** Oracle ホーム・ファイルのディレクトリの場所を入力します。パス名には空白を含めないでください。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 手順 5 で「カスタム」を選択した場合、「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで、インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」または「インストール」をクリックします。
9. 「製品固有の前提条件のチェック」ウィンドウで、Oracle Universal Installer で見つかったエラーをすべて修正して、「次へ」をクリックします。
10. 「サマリー」ウィンドウでインストールされたコンポーネントのリストをチェックし、「インストール」をクリックします。
11. 「管理者」、「ランタイム」または「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、手順 12 ~ 20 に従って、Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントの手順を完了してください。
「InstantClient」インストール・タイプを選択した場合は、手順 21 に進んでください。インストール完了後、4-5 ページの「[Instant Client または Instant Client Light の Oracle Database への接続](#)」の手順に従ってデータベース接続を構成できます。
12. 「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」ウィンドウで、「標準構成の実行」を選択してデフォルトの構成を使用するか、「ネーミング・メソッド構成」オプションを使用します。「次へ」をクリックします。(残りの手順は、「ネーミング・メソッド」を使用した場合を想定したものです。)

13. 「ネーミング・メソッドの構成 - メソッドの選択」 ウィンドウで、指定するネーミング・メソッドを選択して「次へ」をクリックします。

ほとんどの場合、「ローカル・ネーミング」で十分です。
14. 「ネット・サービス名の構成 - サービス名」 ウィンドウで、接続先のデータベース・サービスの名前を入力します。「次へ」をクリックします。

たとえば、sales という名前のデータベースに接続するには「sales」と入力します。
15. 「ネット・サービス名の構成 - プロトコルの選択」 ウィンドウで、選択したプロトコルに応じて適切な情報を入力し、「次へ」をクリックします。
16. 「ネット・サービス名の構成 - TCP/IP プロトコル」 ウィンドウで、Oracle データベースをインストールするコンピュータのホスト名を入力します。ポート番号を指定して、「次へ」をクリックします。

たとえば、コンピュータ shobeen に接続するには「shobeen」と入力します。
17. 「ネット・サービス名の構成 - テスト」 ウィンドウで「はい」をクリックして接続のテストを実行します。「次へ」をクリックします。

ほとんどの場合、Oracle Universal Installer によってダイアログ・ボックスに提供されるデフォルトのユーザー名とパスワードが、ターゲット・データベースのユーザー名とパスワードと一致しないという理由のみでテストは失敗します。「ログインの変更」をクリックし、ユーザー名とパスワードを再入力してから「OK」をクリックします。
18. 「接続中」 ウィンドウで「次へ」をクリックします。
19. 「ネット・サービス名」 ウィンドウで、使用するネット・サービスの名前を入力します。
20. 残りの入力指示に従って、構成を完了します。
21. 「インストールの終了」 ウィンドウで「終了」をクリックし、「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
22. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、OraInstalldate_time ディレクトリを削除します。OraInstalldate_time ディレクトリには、約 50.5MB のファイルが保持されます。このディレクトリは、TEMP 環境変数設定によって設定された場所に作成されます。

コンピュータを再起動しても、OraInstalldate_time ディレクトリは削除されます。
23. 第 4 章「Oracle Database Client のインストール後の作業」に進んで、インストール後の作業を完了します。

Oracle Database Client のインストール後の作業

この章では、インストール後の作業について説明します。

- [インストール後の必須作業](#)
- [インストール後の推奨作業](#)
- [製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成](#)

注意： この章では、基本構成についてのみ説明します。より高度な構成およびチューニングの情報は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』および製品固有の管理およびチューニング・ガイドを参照してください。

インストール後の必須作業

この項の項目は次のとおりです。

- [パッチのダウンロードとインストール](#)
- [Instant Client の更新](#)

パッチのダウンロードとインストール

必須のパッチをダウンロードするには、インストールに必要なパッチについて [OracleMetalink](#) の Web サイトを確認してください。これにより、Oracle Database Client を最新の状態に更新できます。

注意：パッチをダウンロードしても Instant Client を更新できません。Instant Client を更新するには、4-3 ページの「[Instant Client の更新](#)」の手順を実行してください。

1. Web ブラウザを使用して [OracleMetalink](#) の Web サイトを表示します。
`http://metalink.oracle.com`
2. [OracleMetalink](#) にログインします。

注意：[OracleMetalink](#) に登録していない場合は、「[Register for MetaLink!](#)」をクリックします。表示される指示に従って登録してください。

3. [OracleMetalink](#) のメイン・ページで「[Patches](#)」をクリックします。
4. 「[Simple Search](#)」を選択します。
5. 次の情報を指定して「[Go](#)」をクリックします。
 - 「[Search By](#)」フィールドで、「[Product](#)」または「[Family](#)」を選択し、RDBMS サーバーを指定します。
 - 「[Release](#)」フィールドで、現行リリース番号を指定します。
 - 「[Patch Type](#)」フィールドで、Patchset/Minipack を指定します。
 - 「[Platform or Language](#)」フィールドで、プラットフォームを選択します。
6. 「[View ReadMe](#)」アイコンをクリックしてアクセスできるパッチの README ファイルを開き、インストールの手順に従います。

一部のパッチは Oracle Universal Installer でインストールしますが、その他のパッチには専用の手順が必要です。インストールを行う前に、必ず README を読むことをお勧めします。
7. 「Patch set」ページに戻り、「[Download](#)」をクリックしてファイルをシステムに保存します。
8. unzip ユーティリティを使用して、[OracleMetaLink](#) からダウンロードした Oracle のパッチを解凍します。

Instant Client の更新

Instant Client を更新する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/index.html>) から Instant Client をダウンロードします。
2. 新しいファイルで旧ファイルを上書きします。

別のディレクトリにファイルを置く（および旧ファイルを削除する）場合、新しい場所を反映するように PATH 環境変数の設定を更新してください。

インストール後の推奨作業

インストールの完了後、次の項で説明する作業を実行することをお勧めします。

- [Instant Client Light の構成](#)
- [Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続](#)
- [Instant Client または Instant Client Light の Oracle Database への接続](#)
- [ユーザー・アカウントの設定](#)
- [Oracle Enterprise Manager Java Console の実行](#)
- [Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザーへの追加権限の付与](#)
- [Oracle Database 10g リリース 2 \(10.2\) での Oracle9i の言語および定義ファイルの使用](#)
- [Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成](#)

Instant Client Light の構成

Instant Client Light を構成するには、これを Instant Client のかわりにデフォルトにする必要があります。

Instant Client Light を構成する手順は、次のとおりです。

1. `ORACLE_BASE\ORACLE_CLIENT_HOME` ディレクトリで、`oraoci10.dll` ファイルの名前を変更するか削除します。
`oraoci10.dll` ファイルは、Instant Client 用のメイン・バイナリです。
2. `ORACLE_BASE\ORACLE_CLIENT_HOME\install\instantclient\light` ディレクトリから、`oraoci10.dll` ファイルを `ORACLE_BASE\ORACLE_CLIENT_HOME` ディレクトリにコピーします。
`oraoci10.dll` ファイルは、Instant Client Light 用のバイナリです。
3. PATH 環境変数が `ORACLE_BASE\ORACLE_CLIENT_HOME` ディレクトリを指していることを確認します。

注意： Instant Client の PATH が設定されていない場合、アプリケーションは最初に、通常の Instant Client ライブラリのロードを試みます。これらが見つからなかった場合、アプリケーションは、次に Instant Client Light ライブラリのロードを試みます。

Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続

Oracle Universal Installer を実行して Oracle Database Client をインストールした後、Net コンフィギュレーション・アシスタント (NetCA) を使用して、Oracle データベースに接続するよう Oracle Database Client を構成する必要があります。インストールの最後に、Oracle Universal Installer からデータベース接続を構成するよう要求されます。このオプションを省略した場合、またはデータベース接続を後で変更する必要がある場合、「**管理者**」、「**ランタイム**」または「**カスタム**」インストール・タイプでインストールしたときは、次の手順を実行してください。

関連項目：「**InstantClient**」インストール・タイプをインストールした場合は、4-5 ページの「**Instant Client または Instant Client Light の Oracle Database への接続**」を参照してください。

Oracle Database Client を Oracle データベースに接続する手順は、次のとおりです。

1. 「**スタート**」メニューから、「**Oracle - HOME_NAME**」→「**Configuration and Migration Tools**」→「**Oracle Net Configuration Assistant**」を選択します。
2. 「ようこそ」ウィンドウで「**ローカル・ネット・サービス名構成**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
3. 「ネット・サービス名の構成」ウィンドウで「**追加**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
4. 「サービス名」ウィンドウで接続する Oracle データベースの名前を入力し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロトコルの選択」ウィンドウで使用するプロトコルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「プロトコル」ウィンドウで、選択したプロトコルに応じて適切な情報を入力し、「**次へ**」をクリックします。
7. 「ネット・テスト」ウィンドウで接続をテストするかどうかを選択し、「**次へ**」をクリックします。
8. 「ネット・サービス名」ウィンドウでネット・サービスの名前を入力し、「**次へ**」をクリックします。
9. 他のネット・サービス名の構成に関する、残りの質問に回答し、「**終了**」をクリックして構成を完了します。

Net コンフィギュレーション・アシスタントにより、次の場所に tnsnames.ora ファイルが作成されます。

```
ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin\tnsnames.ora
```

関連項目：Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントの詳細は、『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

Instant Client または Instant Client Light の Oracle Database への接続

Instant Client または Instant Client Light を Oracle データベースに接続する前に、Instant Client ライブラリを含むディレクトリが PATH 環境変数で指定されていることを確認します。(デフォルトでは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer によって PATH 変数が更新されますが、その後、別のユーザーがこの変数を不用意にリセットする可能性があります。) このディレクトリは、インストール中に指定した Oracle ホーム・ディレクトリです。

たとえば、通常の Instant Client の場合は次のようになります。

```
C:\> oracle\products\10.2.0\client_1
```

Instant Client Light の場合は次のようになります。

```
C:\> oracle\products\10.2.0\client_1\light
```

PATH 環境変数の確認後、次の方法のいずれかを使用して、クライアント・アプリケーションの Oracle Database 接続情報を指定できます。

- 簡易接続ネーミング・メソッドを使用した接続の指定
- `tnsnames.ora` ファイルの構成による接続の指定
- 空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定

簡易接続ネーミング・メソッドを使用した接続の指定

Instant Client の `tnsnames` 設定を構成することなく、クライアント・アプリケーションから直接 Oracle Database に対する接続アドレスを指定できます。この方法は、`tnsnames.ora` ファイルを作成および管理する必要がないという点で便利です。ただし、アプリケーション・ユーザーは、アプリケーションにログインするときにホスト名およびポート番号を指定する必要があります。

たとえば、クライアント・コンピュータで SQL*Plus を実行しており、ホスト名が `shobeen`、ポート番号が `1521` のデータベース・サーバーにある `sales_us` データベースへ接続するとします。SQL*Plus をコマンドラインから起動した場合、次のようにしてログインできます。

```
Enter user-name: system@admin@//shobeen:1521/sales_us
```

同様に、アプリケーション・コードで Oracle Call Interface ネット・ネーミング・メソッドを使用して、Instant Client と Oracle Database の接続を作成できます。たとえば、`OCIserverAttach()` コール内の次の形式により、接続情報を指定します。

- 次の形式で SQL 接続 URL 文字列を指定します。

```
//host[:port] [/service_name]
```

次に例を示します。

```
//shobeen:1521/sales_us
```

- あるいは、SQL 接続情報を Oracle Net キーワード値ペアとして指定できます。次に例を示します。

```
"(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=shobeen) (PORT=1521))
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=sales_us)))"
```

関連項目： Oracle Call Interface Instant Client の使用方法の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

tnsnames.ora ファイルの構成による接続の指定

デフォルトでは、Instant Client をインストールする場合、Oracle Universal Installer では、サンプルの `tnsnames.ora` ファイルも、通常このファイルの作成に使用される Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタント・ユーティリティも含まれません。しかし、ユーザーが実際のホスト名およびポート番号を指定するをなくすには、Instant Client から Oracle Database への接続の設定に `tnsnames.ora` ファイルを使用することを検討します。

別の Oracle インストールからこのファイルをコピーして変更することによって、`tnsnames.ora` ファイルを手動で作成するか、または Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントを使用して、このファイルを自動的に作成および管理できます。

Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を実行します。
2. 「カスタム」インストール・タイプを選択します。
3. 「使用可能な製品コンポーネント」リストで、**Oracle Network ユーティリティ**を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 「サマリー」ウィンドウで「インストール」をクリックしてから、「終了」および「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。

Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントをインストールした後、各クライアント・コンピュータに対して 4-4 ページの「[Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続](#)」に記載されている手順を実行します。

次に、各クライアント・コンピュータ上で、次のいずれかの設定を構成します。

- `TNS_ADMIN` 環境変数を設定し、`tnsnames.ora` ファイルの名前と位置を指定します。
- `tnsnames.ora` ファイルを `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin` ディレクトリ内に配置し、`ORACLE_HOME` 環境がこの Oracle ホームに設定されていることを確認します。

関連項目： Oracle Call Interface Instant Client 接続文字列の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定

接続文字列を空の接続文字列 ("") に設定してから、LOCAL 環境変数を次のいずれかの値に設定できます。

- 直接アドレス (4-5 ページの「[簡易接続ネーミング・メソッドを使用した接続の指定](#)」を参照)。
- Oracle Net キーワード値ペア。
- `tnsnames.ora` エントリ。さらに、`TNS_ADMIN` を `tnsnames.ora` の場所に設定します。
- `tnsnames.ora` エントリ。さらに、次のようにします。
 - `ORACLE_HOME/network/admin` にある `tnsnames.ora` ファイル
 - `ORACLE_HOME` 環境変数をこの Oracle ホームに設定

この方法により、アプリケーションは、アプリケーション・コード自体が空の接続文字列を使用する場合に、接続文字列を内部的に指定できます。空の接続文字列のメリットは、アプリケーション自体が `tnsnames.ora` エントリを指定する必要がないという点です。かわりに、ユーザーがアプリケーションを起動した場合、データベースの場所は、スクリプトまたは環境、つまり LOCAL 環境変数をどこに設定したかによって決定されます。空の文字列を使用するデメリットは、アプリケーションがデータベースに接続するためにこの追加情報を構成する必要があるという点です。

ユーザー・アカウントの設定

追加のユーザー・アカウントの設定の情報は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Java Console の実行

Oracle Enterprise Manager Database Control または Grid Control を使用する他に、このリリースまたは以前のリリースからデータベースを管理するために Oracle Enterprise Manager Java Console を使用できます。Java Console は「管理者」インストール・タイプを使用してインストールします。

注意： 可能な場合は、Java Console ではなく Database Control を使用することをお勧めします。

Java Console を起動する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 次のコマンドを入力し、「OK」をクリックします。

```
oemapp console
```

注意： Oracle Enterprise Manager Java Console を「スタート」メニューから起動することもできます。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Enterprise Manager Console」を選択します。

関連項目： 4-7 ページの「[Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザーへの追加権限の付与](#)」

Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザーへの追加権限の付与

Oracle Enterprise Manager Java Console を使用してデータベースを管理している場合、リポジトリ・ユーザーに次の権限を付与し、リポジトリを作成します。

```
CREATE CLUSTER
CREATE DATABASE LINK
CREATE SEQUENCE
ALTER SESSION
CREATE SYNONYM
CREATE TABLE
CREATE VIEW
```

注意： Oracle Enterprise Manager Java Console は、Oracle Database Client インストール・メディアに収録されています。

次の手順を実行し、リポジトリ・ユーザーを作成して権限を付与します。

1. スタンドアロン Java Console を起動します。
2. ナビゲータ・ツリーでデータベース・ノードをダブルクリックし、NORMAL ロールを持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。
「作成」ウィンドウが表示されます。
4. 「作成」ウィンドウでデータベース・ノードを開き、「ユーザー」を選択します。次に、「作成」ボタンをクリックします。
「ユーザーの作成」プロパティ・シートが表示されます。
5. 「一般」ページでユーザー名とパスワードを入力し、デフォルトの表領域として OEM_REPOSITORY、一時表領域として TEMP を選択します。

6. 「ロール」 ページで、リポジトリ・ユーザーに CONNECT ロールおよび SELECT_CATALOG_ROLE ロールを付与します。
7. 「システム権限」 ページで、リポジトリ・ユーザーに、CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE、CREATE TYPE、EXECUTE ANY TYPE、SELECT ANY TABLE、CREATE CLUSTER、CREATE DATABASE LINK、CREATE SEQUENCE、ALTER SESSION、CREATE SYNONYM、CREATE TABLE、CREATE VIEW 権限を付与します。
8. 「割当て制限」 ページで、OEM_REPOSITORY および TEMP に「無制限」を指定します。
9. 「ユーザーの作成」 プロパティ・シートで、「作成」 ボタンをクリックします。

Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) での Oracle9i の言語および定義ファイルの使用

Oracle9i データベースの言語および地域の定義ファイルを Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) で使用できます。Oracle Database がインストールされているコンピュータがこの機能を使用するように構成されている場合、この機能を各クライアント・コンピュータでも使用できるようにする必要があります。

この機能を使用可能にする手順は、次のとおりです。

1. cr9idata.pl スクリプト (デフォルトの場所は `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\nls\data\old`) を実行します。
 選択した Client インストール・タイプにこのディレクトリが含まれていない場合、cr9idata.pl スクリプトはデフォルトの Oracle Database インストール内の同じディレクトリ・パスにあります。
2. ORA_NLS10 環境変数が、言語および地域の新規定義ファイルをインストールしたディレクトリ (デフォルトの場所は `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\nls\data`) を指すように設定します。
3. Oracle Database を再起動します。

関連項目：

- b_cr9idata 変数を設定して、Oracle Universal Installer で実行できるレスポンス・ファイルの詳細は、[付録 B 「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Client のインストール」](#) を参照してください。
- このリリースの Oracle Database から影響を受けるグローバル化セッション・サポートの詳細は、[付録 C 「Oracle Database Client グローバリゼーション・サポートの構成」](#) を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバル化セッション・サポート初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成

Oracle 固有のカウンタを表示して使用できるようにするには、その前に `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\bin` ディレクトリにある `operfcfg.exe` を使用して SYSTEM パスワードを指定する必要があります。

システム・パスワードを設定するには、次を入力します。

```
operfcfg.exe -U SYSTEM -P password -D TNS_Alias_for_database
```

関連項目： Oracle Counters for Windows Performance Monitor の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成

適切なエントリを `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルに追加することにより、Oracle Net Services と通信するように Oracle Database Client を構成できます。以前のリリースの Oracle ソフトウェアがある場合は、Oracle Net の `tnsnames.ora` および `listener.ora` 構成ファイルの情報を、以前のリリースから新しいリリースの対応するファイルにコピーできます。

注意： `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルのデフォルトの場所は、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥network¥admin` ディレクトリです。

Oracle Database Client ソフトウェアの削除

この章では、Oracle Database Client ソフトウェアの削除方法について説明します。

- [Windows](#) での Oracle サービスの停止
- [Oracle Universal Installer](#) を使用した Oracle Database Client の削除
- [残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法](#)

注意： Oracle コンポーネントを最初に削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用します。新規の Oracle インストールに関するインストールおよび構成の問題を回避するには、この章で説明する手順に従ってください。

関連項目： 個々の要件や制限については、コンポーネント固有のドキュメントを参照してください。

Windows での Oracle サービスの停止

Oracle コンポーネントまたはレジストリ・エントリを削除する前に、まず Oracle Windows サービスを停止する必要があります。

関連項目： サービス停止の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

Windows のサービスを停止する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「サービス」ユーティリティを開きます。「スタート」メニューから「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
2. Oracle のサービス (Oracle または Ora で始まる名前) が存在し、状態が「開始」である場合、各サービスを選択して、「停止」をクリックします。
3. 「サービス」を終了します。

Oracle Universal Installer を使用した Oracle Database Client の削除

最初に Oracle Universal Installer を使用して、コンピュータ上のインベントリから Oracle Database Client を削除します。残りのコンポーネントは、後から手動で削除する必要があります。この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン](#)
- [Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する手順](#)

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン

次のガイドラインに従います。

- 最初に Oracle Universal Installer を使用して削除する前に、Oracle Database Client コンポーネントを手動で削除しないでください。ただし、インストール中に次の方法のいずれかを使用して Oracle Universal Installer を終了した場合は除きます。
 - 「取消」をクリックした場合
 - コンピュータの電源をオフにした場合
 - インストールが完了していない場合 (つまり、すべての必須構成ツールが最後まで実行されていない)

これらの場合、Oracle Universal Installer ではインストールがそのインベントリに登録されません。ただし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。これらのファイルは手動で削除し、インストールを再開します。

- Oracle ホームを手動で削除する必要がある場合、最初に Oracle Universal Installer を使用して Oracle コンポーネントを削除します。Oracle ホームを手動で削除する方法の一例として、Windows のエクスプローラまたはコマンドプロンプトを使用してディレクトリ構造を削除する方法があります。

コンポーネントが Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままの状態のため、最初に Oracle ホームを手動で削除しないでください。その後、同じホームにインストールしようとする、Oracle Universal Installer によってコンポーネントがすでにインストールされていると判断されるため、選択したコンポーネントの一部またはすべてがインストールされない可能性があります。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する手順

Oracle Universal Installer により、インストール中に Oracle コンポーネント用の Windows サービスが作成されます。ただし、Oracle Universal Installer では Oracle Net Configuration Assistant で作成されたすべてのサービスは削除されません。

Oracle Universal Installer を使用して Windows コンピュータでコンポーネントを削除する手順は、次のとおりです。

1. まず、5-2 ページの「[Windows での Oracle サービスの停止](#)」の手順に従います。
2. Oracle Universal Installer を起動します。起動方法は、インストールしている Oracle Database Client のバージョンによって異なります。
 - a. 「管理者」、「ランタイム」または「カスタム」バージョンの Oracle Database Client をインストールした場合、Oracle Universal Installer もインストールされます。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle -HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。Oracle Universal Installer の「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
 - b. 「InstantClient」バージョンの Oracle Database Client をインストールした場合、Oracle Universal Installer はインストールされません。代わりに、インストール・メディアか、ダウンロードまたはコピーしたインストール・ファイル用に作成したインストール・ディレクトリから実行します。

そのためには、Oracle Database インストール・メディアを挿入して client ディレクトリにナビゲートします。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。次に、setup.exe をダブルクリックして Oracle Universal Installer を起動します。「ようこそ」ウィンドウで「製品のインストール/削除」をクリックします。
3. 「製品の削除」ボタンをクリックします。「インベントリ」ウィンドウが表示されます。
4. 削除する Oracle ホームを選択します。Oracle ホームの選択したコンポーネントを削除する場合のみ、インストール済みのコンポーネントのツリーを展開します。

たとえば、「ランタイム」オプションで Oracle Database Client をインストールし、後から「カスタム」オプションで追加コンポーネントをインストールした場合、Oracle ホーム・コンポーネントを展開して、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントを表示します。
5. 削除するコンポーネントのボックスを選択します。
6. 「削除」をクリックします。「確認」ウィンドウが表示されます。
7. 「はい」をクリックして選択したコンポーネントを削除します。

注意：一部のコンポーネントを削除すると、他のコンポーネントが正常に機能しなくなる可能性があるというメッセージが表示される場合があります。

- コンポーネントがコンピュータから削除されると、削除されたコンポーネントが含まれていない「インベントリ」ウィンドウが表示されます。
8. 「閉じる」をクリックして、「インベントリ」ウィンドウを閉じます。
 9. 「取消」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
 10. 「はい」をクリックして、終了を確認します。
 11. Oracle Universal Installer を終了したら、次の項に進み、残りの Oracle Database Client コンポーネントを削除します。

残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法

Oracle Universal Installer では、すべての Oracle コンポーネントは削除されません。Oracle Universal Installer を使用して Oracle コンポーネントを削除した後、残ったレジストリ・キー、環境変数、「スタート」メニューのオプションおよびディレクトリを手動で削除する必要があります。

この項の項目は次のとおりです。

- [Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除](#)
- [PATH 環境変数のパスの更新](#)
- [「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除](#)
- [Oracle Database Client ディレクトリの削除](#)

注意：まれに、最初から Oracle Universal Installer を使用せずに、手動によりコンピュータから Oracle コンポーネントを完全に削除することで、システムの深刻な問題が解決することがあります。これはあくまでも最後の手段として行い、しかもシステムからすべての Oracle コンポーネントを削除する場合のみ行います。

Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除

Oracle Universal Installer では Oracle Net Configuration Assistant で作成されたすべてのサービスは削除されません。また、削除されないレジストリ・キーがその他にいくつかあります。次の各項目のいずれかの手順に従い、存在するレジストリ・キーをすべて手動で削除する必要があります。

- [Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除](#)
- [すべての Oracle レジストリ・キーの削除](#)

注意：自分の責任で Microsoft のレジストリ エディタを使用してください。レジストリ エディタを間違えて使用すると、深刻な問題が発生し、オペレーティング・システムを再インストールすることが必要になる可能性があります。

Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除

Oracle Net Services レジストリ・エントリが存在する場合、そのみを削除する手順は、次のとおりです。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. まず、5-2 ページの「[Windows での Oracle サービスの停止](#)」の手順に従います。
3. 「スタート」メニューから「[ファイル名を指定して実行](#)」を選択し、次のコマンドを入力します。

```
regedit
```

4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動し、OracleHOME_NAME¥TNSListener レジストリ・エントリを削除します。

Oracle Universal Installer を実行して Oracle Database Client を削除した場合、他のすべての Oracle Net Services が削除されています。

5. レジストリ エディタを終了します。
6. コンピュータを再起動します。

すべての Oracle レジストリ・キーの削除

Oracle レジストリ・キーが存在する場合、すべてのキーをコンピュータから削除する手順は、次のとおりです。

注意： これらの手順により、Oracle のコンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリがすべてコンピュータから削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、細心の注意を払ってください。間違ったエントリを削除すると、システムが故障する可能性があります。これらの手順を完了した後、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\DB_NAME` の下のデータベース・ファイルを削除してください。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. まず、5-2 ページの「Windows での Oracle サービスの停止」の手順に従います。
3. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、次のコマンドを入力します。

```
regedit
```

4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
5. 次で始まるキーを削除します。
 - ORAMMCPMON10
 - ORCLSSO
 - OraOLEDB.ErrorLookup
 - OraOLEDB.Oracle
 - OracleInProcServer.XOraServer

注意： Instant Client をインストールしている場合、これらのレジストリ・キーは表示されません。

6. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE に移動します。
7. ORACLE Group キーを削除します。
8. Oracle Services for Microsoft Transaction Server をインストールしている場合、HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Eventlog\Application に移動します。
9. Oracle Services for Microsoft Transaction Server キーを削除します。
10. HKEY_CURRENT_USER\Software に移動します。
11. Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\MenuOrder\Start Menu Programs の下にある Oracle-HOME_NAME エントリなど、すべての Oracle キーを削除します。
12. レジストリ エディタを終了します。
13. コンピュータを再起動します。

PATH 環境変数のパスの更新

PATH 環境変数を確認し、すべての Oracle エントリを削除します。

1. 「コントロールパネル」の「システム」を表示します。
2. 「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。
3. システム変数 PATH を選択して編集し、すべての Oracle エントリを削除します。

たとえば、PATH 変数に `ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME` を含む Oracle エントリを削除します。次のようなエントリを含む PATH 変数があります。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥bin;ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥bin¥client;  
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥bin
```

4. 変更を保存して「システム」を終了します。

「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除

「スタート」メニューに Oracle Database Client エントリがないか確認し、あれば削除します。

次の手順を実行します。

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」を選択します。
2. 「Oracle - HOME_NAME」を右クリックして、メニューから「削除」を選択します。

次の方法を使用しても、Oracle Database Client メニューのエントリを削除できます。

1. 「スタート」ボタンを右クリックし、ポップアップ・メニューを表示します。
2. 「エクスプローラ - All Users」オプションを選択します。
3. 「Documents and Settings」の下で ¥スタートメニュー¥プログラムフォルダを開きます。
4. Oracle - HOME_NAME フォルダを右クリックして削除します。

Oracle Database Client ディレクトリの削除

すべての Oracle Database Client レジストリ・キーを削除し、コンピュータを再起動した後、存在するすべての Oracle Database Client ディレクトリおよびファイルを削除します。

1. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:¥program files¥oracle` ディレクトリを削除します。
2. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、ハード・ドライブ上のすべての `ORACLE_BASE` ディレクトリを削除します。

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーの使用を可能にする Java Access Bridge のインストール方法を説明します。

- [概要](#)
- [JRE 1.4.2 の設定](#)
- [インストール済の Oracle コンポーネントの設定](#)

注意： Java Access Bridge および JAWS は Windows Vista で、現時点では確認されていません。

概要

Java Access Bridge は、JAWS スクリーン・リーダーなど、Windows プラットフォームで実行中の Java アプリケーションを読み上げるための障害支援技術を使用可能にします。障害支援技術は、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Database Control など、Java ベースのインタフェースを読み上げることができます。

Oracle Database、Oracle Database Client および Oracle Database Companion CD インストール・メディアには、インストール時に Oracle Universal Installer によって使用される Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が含まれています。JRE により、インストール時に Java Access Bridge が使用できるようになります。Oracle コンポーネントのインストール後に、Java Access Bridge をインストールおよび構成する場合、A-2 ページの「[インストール済の Oracle コンポーネントの設定](#)」を参照してください。

JRE 1.4.2 の設定

JRE 1.4.2 で Java Access Bridge を設定するには、Oracle インストール・メディアにある次のバッチ・ファイルを実行します。

```
DRIVE_LETTER:¥install¥access_setup.bat
```

バッチ・ファイルの実行後に、障害支援技術プログラムを再起動します。

インストール済の Oracle コンポーネントの設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に、Windows 用の Java Access Bridge をインストールし、構成する方法について説明します。この項の内容は、次のとおりです。

- [Java Access Bridge のインストール](#)
- [Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成](#)

Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle インストール・メディアで、AccessBridge ディレクトリに移動します。
2. accessbridge-1_0_4.zip ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムにこのファイルを展開します。次に例を示します。

```
c:¥> AccessBridge-1.0.4
```
3. [表 A-1](#) に示した Java Access Bridge ファイルを、Oracle コンポーネントによって使用される JRE 1.4.2 ディレクトリにコピーします。デフォルトでは、Oracle コンポーネントによって使用される JRE は次の場所にインストールされています。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2
```

表 A-1 は、ハード・ドライブ上の Java Access Bridge の場所から、Oracle コンポーネントによって使用される JRE ディレクトリにコピーする必要のあるファイルを示しています。

表 A-1 ファイルの JRE ディレクトリへのコピー

コピーするファイル	コピー先
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥ installerFiles¥jaccess-1_4.jar	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥ jre¥1.4.2¥lib¥ext
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥ installerFiles¥access-bridge.jar	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥ jre¥1.4.2¥lib¥ext
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥ installerFiles¥JavaAccessBridge.dll	windows_directory¥ system32
¥AccessBridge-1_0_4¥installer installerFiles¥ WindowsAccessBridge.dll	windows_directory¥ system32
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥ JAWTAccessBridge.dll	windows_directory¥ system32
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥ accessibility.properties	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥ jre¥1.4.2¥lib¥ext

4. jaccess-1_4.jar (ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext にあります) の名前を jaccess.jar に変更します。
5. インストールに成功すると、次の場所にある Java Access Bridge のドキュメントにアクセスできます。

```
c:¥> AccessBridge-1.0.4¥doc
```

Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストールの完了後に、Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成できます。それには、システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH を、インストール済の Java Access Bridge ファイルを指すように設定する必要があります。

次の手順を実行します。

1. 「コントロールパネル」の「システム」を表示します。
2. 「詳細」タブを選択します。
3. 「環境変数」ボタンをクリックします。
4. 「システム環境変数」リストの下の「新規」ボタンをクリックします。「新しいシステム変数」ダイアログが表示されます。
5. 「変数名」フィールドに、ORACLE_OEM_CLASSPATH と入力します。
6. 「変数値」フィールドに、jaccess.jar および access-bridge.jar へのフル・パスを入力します。

2つのパスはセミコロンで区切ります。引用符や空白文字を使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルトの場所にインストールされている場合、設定は次のようになります。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥jaccess.jar;ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥access-bridge.jar
```

7. 「OK」をクリックします。

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Client のインストール

この付録では、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Database Client のサイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行する方法を説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- [レスポンス・ファイルの働き](#)
- [レスポンス・ファイルの準備](#)
- [レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)

レスポンス・ファイルの働き

Oracle Universal Installer の起動時にレスポンス・ファイルを指定すると、Oracle ソフトウェアのインストールおよび構成のすべてまたは一部を自動化できます。Oracle Universal Installer では、一部またはすべてのプロンプトに対する応答にレスポンス・ファイルの値が使用されます。

通常、Oracle Universal Installer は対話モードで実行されます。つまり、Graphical User Interface (GUI) 画面で情報の入力を要求されます。この情報を提供するためにレスポンス・ファイルを使用するときは、次のいずれかのモードを使用してコマンド・プロンプトで Oracle Universal Installer を実行します。

- **サイレント・モード** : Oracle Universal Installer では画面は表示されません。起動に使用したコマンド・ウィンドウに進捗情報が表示されます。サイレント・モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定して `setup.exe` を実行し、Oracle Universal Installer のプロンプトへの応答を含んだレスポンス・ファイルを含めます。
- **非対話（または抑制）モード** : Oracle Universal Installer は、レスポンス・ファイルに情報が指定されなかった画面のみを表示します。レスポンス・ファイルまたはコマンドライン・プロンプトで変数を使用して、「ようこそ」や「サマリー」など、情報を入力しないその他の Oracle Universal Installer の画面を非表示にできます。非対話モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定せずに `setup.exe` を実行します。ただし、レスポンス・ファイルまたは該当するその他のパラメータは含めます。

サイレントまたは非対話型インストール用の設定は、レスポンス・ファイルにリストされた変数に値を入力することで定義します。たとえば Oracle ホーム名を指定するには、次の例に示すように `ORACLE_HOME_NAME` 変数に適切な値を指定します。

```
ORACLE_HOME_NAME="OraDBHome1"
```

レスポンス・ファイルの変数設定を指定するもう 1 つの方法は、Oracle Universal Installer を実行するときにコマンドライン引数として渡す方法です。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -silent "ORACLE_HOME_NAME=OraDBHome1" ...
```

変数およびその設定は必ず引用符で囲んでください。

関連項目 : レスポンス・ファイルの書式の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

サイレント・モードまたは非対話モードを使用する理由

表 B-1 に、Oracle Universal Installer をサイレント・モードまたは抑制モードで実行するいくつかの理由を示します。

表 B-1 サイレント・モードまたは非対話モードを使用する理由

モード	使用する場合
サイレント	<p>次の場合はサイレント・モードを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アンアテンド・インストールを実行する場合 ■ ユーザーとの対話なしで複数のシステムに同様のインストールを複数実行する場合 <p>Oracle Universal Installer では、起動に使用したウィンドウに進捗情報が表示されますが、Oracle Universal Installer の画面は表示されません。</p>
非対話	<p>Oracle Universal Installer プロンプトのすべてではなく一部にのみデフォルトの応答を指定して、複数のシステムに類似した Oracle ソフトウェアのインストールを実行する場合は、非対話モードを使用します。</p> <p>特定のインストーラ画面に必要な情報をレスポンス・ファイルに指定しないと、Oracle Universal Installer ではその画面が表示されます。必要な情報をすべて指定した画面は表示されません。</p>

レスポンス・ファイルの一般的な使用手順

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Database Client をインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 必要なインストール設定用にレスポンス・ファイルをカスタマイズまたは作成します。
次のいずれかの方法を使用してレスポンス・ファイルを作成できます。
 - インストールに付属しているサンプルのレスポンス・ファイルの1つを変更する方法
 - コマンド・プロンプトで記録モードを使用して Oracle Universal Installer を実行する方法

B-3 ページの「[レスポンス・ファイルの準備](#)」で、レスポンス・ファイルをカスタマイズまたは作成する方法を説明します。
2. コマンド・プロンプトから、レスポンス・ファイルを指定し、サイレント・モードまたは非対話モードのいずれかを使用して Oracle Universal Installer を実行します。

注意： Windows Vista では、コマンド・プロンプトで Administrator 権限が必要です。

B-5 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」で、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行する方法を説明します。

レスポンス・ファイルの準備

この項では、サイレント・モードまたは非対話モードのインストール時に使用するレスポンス・ファイルを準備する方法について説明します。

- [レスポンス・ファイル・テンプレートの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの記録](#)

レスポンス・ファイル・テンプレートの編集

Oracle には、製品、インストール・タイプおよび構成ツールごとに、レスポンス・ファイルのテンプレートが用意されています。これらのファイルは、Oracle Database インストール・メディア上の `client\response` ディレクトリにあります。

レスポンス・ファイル・テンプレートを使用したレスポンス・ファイルの作成は、Enterprise Edition または Standard Edition のインストール・タイプの場合に使用すると便利です。

表 B-2 に、使用可能な Oracle Database Client のサンプル・レスポンス・ファイルを示します。

表 B-2 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	目的
netca.rsp	Client のインストール・タイプでの構成を実行する Oracle Net Configuration Assistant
clientadmin.rsp	Oracle Database Client の「管理者」インストール
clientcustom.rsp	Oracle Database Client の「カスタム」インストール
instantClient.rsp	Oracle Database Client の「InstantClient」インストール
clientruntime.rsp	Oracle Database Client の「ランタイム」インストール

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Database メディアの `client\response` ディレクトリから、適切なレスポンス・ファイルをハード・ドライブにコピーします。
2. テキスト・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

Oracle Database Client インストール固有の設定を編集する他に、`FROM_LOCATION` パスが正しく、インストール・メディアの `stage` ディレクトリにある `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この変数を、たとえば次のように絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="%myserver%\client\stage\products.xml"
```

パスワードなどの機密情報を、レスポンス・ファイル内ではなくコマンドラインで指定できることを覚えておいてください。この方法は、B-2 ページの「[レスポンス・ファイルの働き](#)」で説明されています。

関連項目：レスポンス・ファイル作成の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。インストールされた Oracle Database で、「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。HTML 形式で表示されます。

3. B-5 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルの記録

レスポンス・ファイルは、記録モードを使用して Oracle Universal Installer を対話モードで実行することで作成できます。この方法は、カスタム・インストールの場合に使用すると便利です。

レスポンス・ファイルを記録すると、「サマリー」ウィンドウの完了直後にレスポンス・ファイルが生成されるので、レスポンス・ファイルを作成するために Oracle Database Client をインストールする必要はありません。この方法でレスポンス・ファイルを作成した後、必要に応じてカスタマイズできます。

非対話モードのインストール中に記録モードを使用する場合、Oracle Universal Installer によりオリジナル・ソースのレスポンス・ファイルに指定されていた変数の値が新規レスポンス・ファイルに記録されます。

注意：「基本インストール」タイプを基にしたレスポンス・ファイルを作成するために記録モードを使用することはできません。

レスポンス・ファイルを記録する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルを作成するコンピュータが、[第2章](#)に説明された要件を満たしていることを確認します。
2. コマンドプロンプトで、`cd` コマンドを使用して、Oracle Universal Installer の `setup.exe` 実行可能ファイルが含まれているディレクトリに変更します。

注意：Windows Vista では、コマンド・プロンプトで Administrator 権限が必要です。

Oracle Database インストール・メディアでは、`setup.exe` は `client` ディレクトリ内にあります。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。

3. 次のコマンドを入力します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile response_file_name
```

`response_file_name` を、新規レスポンス・ファイルの完全パス名に置き換えます。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile
c:¥response_files¥install_oracle10_2.rsp
```

4. Oracle Universal Installer が起動し、インストールの設定を入力します。この設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

5. 「サマリー」ウィンドウが表示され、次のいずれかを実行します。

- レスポンス・ファイルを作成してからインストールを続行する場合は、「**インストール**」をクリックします。
- レスポンス・ファイルを作成するだけで、インストールを続行しない場合は、「**取消**」をクリックします。インストールは停止しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer により、コマンドラインで指定したパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルが保存されます。

6. 新規レスポンス・ファイルを編集して、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータの環境に固有の変更を加えます。

Oracle Database Client インストール固有の設定を編集する他に、FROM_LOCATION パスが正しく、インストール・メディアの stage ディレクトリにある products.xml ファイルを指していることを確認します。この変数を、たとえば次のように絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="¥¥myserver¥client¥response¥stage¥products.xml"
```

パスワードなどの機密情報を、レスポンス・ファイル内ではなくコマンドラインで指定できることを覚えておってください。この方法は、B-2 ページの「[レスポンス・ファイルの働き](#)」で説明されています。

7. 次の「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行

この段階でインストールを実行するには、作成したレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer をコマンドラインで実行できます。Windows Vista では、Administrator 権限でコマンド・プロンプトを開く必要があります。Oracle Universal Installer の実行可能ファイル (setup.exe) には、いくつかのオプションが用意されています。たとえば、これらのオプションのフル・セットに関するヘルプ情報を表示するには、次のように `-help` オプションを指定して setup.exe を実行します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -help
```

「起動を準備中 ...」というメッセージが表示された新しいコマンド・ウィンドウが表示されます。すぐに、そのウィンドウにヘルプ情報が表示されます。

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Database Client をインストールするコンピュータにレスポンス・ファイルを配置します。
2. コマンド・プロンプトで、適切なレスポンス・ファイルを指定して Oracle Universal Installer を実行します。Windows Vista では、Administrator 権限でコマンド・プロンプトを開く必要があります。

次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup [-silent] "variable=setting" [-nowelcome]
[-noconfig] [-nowait] -responseFile filename
```

項目の説明：

- *filename*: レスポンス・ファイルのフルパスを指定します。
- **-silent**: Oracle Universal Installer をサイレント・モードで実行します。「ようこそ」ウィンドウは表示されません。**-silent** を使用する場合、**-nowelcome** オプションは必要ありません。
- **"variable=setting"** は、レスポンス・ファイルに設定するのではなくコマンドラインで実行するレスポンス・ファイル内の変数を指します。変数とその設定は引用符で囲みます。
- **-nowelcome**: インストール時に表示される「ようこそ」ウィンドウが表示されません。
- **-noconfig**: インストール時のコンフィギュレーション・アシスタントの実行が抑制され、かわりにソフトウェアのみのインストールが実行されます。
- **-nowait**: サイレント・インストールの完了時にコンソール・ウィンドウを閉じます。

関連項目：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用した削除の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の製品の削除に関する項を参照してください。

Oracle Database Client グローバリゼーション・サポートの構成

この付録では、グローバリゼーション・サポートに関する次のトピックについて説明します。

- 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用
- NLS_LANG パラメータ
- 一般に使用される NLS_LANG の値
- MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用

この項では、次の機能について説明します。

- 様々な言語での Oracle Universal Installer の実行
- 異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

様々な言語での Oracle Universal Installer の実行

デフォルトでは、Oracle Universal Installer はオペレーティング・システムの選択済言語で動作します。Oracle Universal Installer は、次の言語でも実行できます。

- ポルトガル語 (ブラジル)
- ドイツ語
- 日本語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムの実行されている言語を変更します。たとえば、Windows 2000 の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」→「地域のオプション」を選択します。
 - b. 前述の言語から 1 つを選択して、「OK」を選択します。
2. 3-7 ページの「Oracle Database Client ソフトウェアのインストール」の手順に従って Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択した言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられません。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント (Oracle Net Configuration Assistant など) で使用する言語として、他の言語を選択できます。ただし、これにより Oracle Universal Installer の実行に使用される言語が変更されるわけではありません。Oracle コンポーネントを選択した言語で実行するには、言語をオペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「コントロールパネル」の「地域の設定」ウィンドウで変更できます。

異なる言語で Oracle コンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. 3-8 ページの「Oracle Database Client のインストールの手順」の手順に従って、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「インストールする製品の選択」ウィンドウで「製品の言語」を選択します。
3. 「言語の選択」ウィンドウで、「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントで使用する言語を選択します。
4. 矢印ボタンを使用して言語を「選択された言語」フィールドに移動し、「OK」をクリックします。

5. インストールする製品を適宜選択し、「次へ」を選択します。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが、選択した言語で表示されます。

NLS_LANG パラメータ

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、NLS_LANG パラメータによって定義された各自の言語でデータベースと対話ができます。Oracle Database Client コンポーネントをインストールすると、Oracle Universal Installer により NLS_LANG パラメータがレジストリに設定されます。

オペレーティング・システムのロケール設定により、NLS_LANG パラメータの値がインストール時に決定されます。C-4 ページの表 C-1 に、オペレーティング・システムのロケールと NLS_LANG 値のマッピングを示します。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOMEID¥NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次の形式です。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

項目の説明：

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を示すための規則を指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算するための規則を指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示するために使用されるキャラクタ・セットを制御します。

注意： AL32UTF8 は、XMLType データに適した Oracle Database キャラクタ・セットです。これは、有効なすべての XML 文字をサポートする、IANA に登録された標準 UTF-8 エンコーディングに相当します。

Oracle Database データベース・キャラクタ・セット UTF8 (ハイフンなし) を、データベース・キャラクタ・セット AL32UTF8 またはキャラクタ・エンコーディング UTF-8 と混同しないでください。データベース・キャラクタ・セット UTF8 は、AL32UTF8 に置き換えられています。XML データには UTF8 を使用しないでください。UTF8 では、Unicode バージョン 3.1 以前のみがサポートされます。したがって、有効な XML 文字の一部がサポートされません。AL32UTF8 にはこうした制限はありません。

データベース・キャラクタ・セット UTF8 を XML データに使用すると、致命的エラーが発生したり、セキュリティに悪影響が及ぶ可能性があります。データベース・キャラクタ・セットでサポートされていない文字が入力ドキュメント要素名に含まれる場合、置換文字 (通常は「?」) が代用されます。これにより解析が終了し、例外が発生します。

関連項目：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバリゼーション・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

一般に使用される NLS_LANG の値

表 C-1 に、様々な Windows ロケールに対するデフォルトの NLS_LANG 値を示します。

表 C-1 NLS_LANG パラメータの値

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
アラビア語 (U.A.E.)	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
中国語 (簡体字)	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
中国語 (繁体字)	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
オランダ語 (オランダ)	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
英語 (イギリス)	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252
英語 (アメリカ)	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252
フランス語 (カナダ)	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8MSWIN1252
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
ドイツ語 (ドイツ)	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252
ギリシア語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリア語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8MSWIN1252
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8MSWIN1252
イタリア語 (イタリア)	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16MSWIN949
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語 (ブラジル)	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
ポルトガル語 (ポルトガル)	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_RUSSIA.CL8MSWIN1251
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250

表 C-1 NLS_LANG パラメータの値 (続き)

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
スペイン語 (スペイン)	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
スペイン語 (メキシコ)	MEXICAN_SPANISH_MEXICO.WE8MSWIN1252
スペイン語 (ベネズエラ)	LATIN_AMERICAN_SPANISH_VENEZUELA.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

SQL*Plus、SQL Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用する前に、そのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドが正しい値に設定されていることを確認します。

いくつかの例外はありますが、MS-DOS モードでは、Windows (ANSI コードページ) とは異なるキャラクタ・セット (またはコードページ) を使用し、レジストリでは、デフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コードページに設定されているため、このように正しい値の設定が必要になります。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータを正しく設定していない場合、文字の変換が正しく行われなために、エラー・メッセージやデータが破損します。

日本語、韓国語、中国語 (簡体字) および中国語 (繁体字) では、MS-DOS コードページは ANSI コードページと同一です。この場合、MS-DOS モードで NLS_LANG を設定する必要はありません。

同様に、バッチ・モードで、プロシージャで処理されるファイルのキャラクタ・セットに応じて、バッチ・プロシージャの開始時に、SET NLS_LANG コマンドを挿入し、NLS_LANG に正しいキャラクタ・セットの値を設定します。

表 C-2 は、様々なオペレーティング・システムのロケールに対する MS-DOS モードに対応する Oracle キャラクタ・セットの一覧です。

表 C-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
アラビア語	AR8ASMO8X
カタロニア語	WE8PC850
中国語 (簡体字)	ZHS16GBK
中国語 (繁体字)	ZHT16MSWIN950
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850
オランダ語	WE8PC850
英語 (イギリス)	WE8PC850
英語 (アメリカ)	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850
ギリシア語	EL8PC737
ハンガリア語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16MSWIN949
ノルウェー語	WE8PC850
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866

表 C-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット (続き)

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
トルコ語	TR8PC857

関連項目： Oracle Internet Directory グローバリゼーション・サポートの問題、および Oracle Internet Directory 環境の様々なコンポーネントとツールに必要な NLS_LANG 環境変数については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のディレクトリにおけるグローバリゼーション・サポートに関する項を参照してください。

Oracle Database Client インストールの トラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。

- 要件の確認
- インストール・エラーが発生した場合の操作
- インストール・セッションのログの確認
- サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理
- コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング
- インストール失敗後のクリーン・アップ

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティングの手順を実行する前に、次を実行してください。

- システムが要件を満たしていることと、第2章「Oracle Database Client のインストール前の要件」に示したインストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。
- 製品をインストールする前に、該当するプラットフォーム用の製品に関するリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。リリース・ノートの最新バージョンは、次の Oracle Technology Network の Web サイトにあります。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/>

インストール・エラーが発生した場合の操作

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように操作してください。

- Oracle Universal Installer を終了しないでください。
- インストール・ウィンドウの1つに間違っただけの情報を入力して「次へ」をクリックした場合は、「戻る」をクリックして元のウィンドウに戻り、情報を訂正します。
- Oracle Universal Installer によるファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合、対話型インストールについては D-2 ページの「インストール・セッションのログの確認」を、サイレントまたは非対話型インストールについては D-3 ページの「サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理」を参照してください。
- コンフィギュレーション・アシスタントの実行中にエラーが発生した場合は、D-3 ページの「コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング」を参照してください。
- 問題を解決できない場合は、D-4 ページの「インストール失敗後のクリーン・アップ」の手順に従って、失敗したインストールを削除してください。

インストール・セッションのログの確認

Oracle Universal Installer を Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータで実行する場合、次のディレクトリが作成されます。

```
DRIVE_LETTER:\Program Files\Oracle\Inventory\logs
```

この最初のインストールおよびその後のすべてのインストール中、Oracle Universal Installer により実行されるすべてのアクションがこのディレクトリのログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

対話型インストール用のログ・ファイル名は次の形式になります。

```
installActionsdate_time.log
```

たとえば、対話型インストールを 2005 年 2 月 14 日 9:00:56 A.M. に行った場合、ログ・ファイルは次のような名前になります。

```
installActions2005-02-14_09-00-56-am.log
```

注意： Inventory ディレクトリまたはその内容の削除や、手動での変更は行わないでください。削除や変更を行うと、Oracle Universal Installer でシステムにインストールする製品を見つけれなくなり、インストールが失敗します。

関連項目： D-3 ページの「サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理」

サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

サイレントまたは非対話型インストールが正常に実行されたかどうかを判断するには、`DRIVE_LETTER:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` ディレクトリにある `silentInstallActionsdate_time.log` ファイルを確認します。

サイレント・インストールは、次の場合に失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定していない場合
- 不正または不完全なレスポンス・ファイルを指定している場合
たとえば、製品固有データはすべて正しく指定されているがステージング領域の位置が不正というよくある問題があります。このような場合、`FROM_LOCATION` 変数を調べて、インストール・メディアの `products.xml` ファイルを指していることを確認します。インストール・メディアでは、この `products.xml` は `client¥stage` にあります。
- Oracle Universal Installer にディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer またはコンフィギュレーション・アシスタントは、実行時にレスポンス・ファイルの妥当性を検証します。検証に失敗した場合、インストールまたは構成プロセスは終了します。Oracle Universal Installer では、コンテキスト、書式またはタイプが不正な場合、そのパラメータ値は、ファイルに指定されていないとみなされます。

関連項目：対話型インストールのログ・ファイルの詳細は、D-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング

コンフィギュレーション・アシスタントの実行中に発生したインストール・エラーのトラブルシューティング方法は、次のとおりです。

- D-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」に示したインストール・ログ・ファイルを確認します。
- `ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥cfgtoollogs` ディレクトリにある特定のコンフィギュレーション・アシスタントのログ・ファイルを確認します。エラーの原因となった問題を修正します。
- 「Fatal Error. Reinstall」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを確認して問題の原因を調べます。手順の詳細は、D-4 ページの「[致命的エラー](#)」を参照してください。

コンフィギュレーション・アシスタントの障害

Oracle コンフィギュレーション・アシスタントの障害は、インストール・ウィンドウの最下部に表示されます。追加情報がある場合は、コンフィギュレーション・アシスタント・インタフェースに表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントの実行ステータスは、`installActionsdate_time.log` ファイルに格納されます。

次の表に、実行ステータス・コードを示します。

ステータス	結果コード
コンフィギュレーション・アシスタントの正常終了	0
コンフィギュレーション・アシスタントの異常終了	1
コンフィギュレーション・アシスタントを取消済	-1

致命的エラー

コンフィギュレーション・アシスタントの実行中に致命的エラーが発生した場合は、次のようにします。

1. D-4 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の説明に従って、失敗したインストールを削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール時に Oracle Universal Installer によって作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。[第 5 章「Oracle Database Client ソフトウェアの削除」](#)の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行し、Oracle Database Client の削除、Oracle ディレクトリの手動による削除、およびレジストリエディタからの Oracle キーの削除を行います。その後、ソフトウェアを再インストールします。

用語集

ldap.ora ファイル (ldap.ora file)

Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントによって作成されるファイルで、次のディレクトリ・アクセス情報を含む。

- ディレクトリのタイプ
- ディレクトリの場所
- クライアントまたはサーバーがデータベース・サービスへの接続用の接続識別子を参照または構成するために使用するデフォルトの管理コンテキスト

ldap.ora ファイルは、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin`にある。

listener.ora ファイル (listener.ora file)

次の項目を識別するためのリスナー用構成ファイル。

- リスナー名
- リスナーが接続要求を受け付けるプロトコル・アドレス
- リスニング対象のサービス

listener.ora ファイルは、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin`にある。

Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) では、サービス登録により、データベース・サービスを識別する必要がない。ただし、Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) に静的なサービス構成が必要。

OPPS\$

初期化ファイル・パラメータ `OS_AUTHENT_PREFIX` により、データベースに接続するユーザーを認証するために Oracle で使用される接頭辞をユーザーが指定できる。Oracle では、このパラメータの値をユーザーのオペレーティング・システム・アカウント名およびパスワードの前に連結する。接続要求が発行されると、Oracle では接頭辞の付いたユーザー名をデータベース内の Oracle ユーザー名と比較する。

このパラメータのデフォルト値は "" (NULL 文字列) で、そのためオペレーティング・システム・アカウント名には接頭辞が追加されない。旧リリースでは、OPPS\$ (オペレーティング・システム固有の短縮名) がデフォルト設定であった。

Oracle Net Foundation レイヤー (Oracle Net foundation layer)

クライアント・アプリケーションとサーバー間の接続の確立と維持、およびこれらの中でのメッセージ交換を行うネットワーク通信レイヤー。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名が `cn=OracleContext` のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。1つのディレクトリ内に1つ以上の Oracle コンテキストが存在する可能性がある。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ (Oracle schema)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle には、Oracle Net Services エントリなど、多くの Oracle エントリ・タイプに適用される独自のスキーマがある。Oracle Net Services エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム (Oracle home)

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス (`c:\oracle\product\10.2.0\db_n` など。ここで `n` は Oracle ホームの番号)。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」ウィンドウの「パス」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。

Oracle ホーム名 (Oracle home name)

現行の Oracle ホームの名前。各 Oracle ホームには、コンピュータ上の他のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。インストール中、Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」ウィンドウの「名前」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が要求される。

SID

データベースをコンピュータにあるその他すべてのデータベースと区別する Oracle システム識別子。SID は、文字が 8 文字以上かまたはピリオドを入力しないかぎり、グローバル・データベース名のデータベース名部分 (たとえば、`sales.us.acme.com` の `sales`) に自動的にデフォルト設定される。デフォルト値は、そのまま確定することも、変更することもできる。

sqlnet.ora ファイル (sqlnet.ora file)

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次のものを指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加するクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントにより使用されるネーミング・メソッドの順序
- 使用するロギング機能およびトレース機能
- 接続の経路
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

`sqlnet.ora` ファイルは、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\network\admin` にある。

Terminal Server

Microsoft Windows Terminal Server は、Windows シン・クライアントのターミナル・サーバーで、Windows Server 上の複数の同時クライアント・セッションに対するサポートを追加する製品。Windows Terminal Server では、オペレーティング・システムの Graphical User Interface (GUI) を Oracle データベースのユーザーに提供する。

tnsnames.ora ファイル (tnsnames.ora file)

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。tnsnames.ora ファイルは、ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥network¥admin にある。

UNC

「汎用命名規則」を参照。

インストール・タイプ (installation type)

インストールするコンポーネントを自動的に選択する事前定義のコンポーネント・セット。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-3 ページの「Oracle Database Client のインストール・タイプ」を参照。

オペレーティング・システム認証による接続 (operating system authenticated connections)

Windows ログイン接続情報を Oracle Database に接続するユーザーの認証に使用できる。Windows 固有の認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle Database に接続できる。
- Oracle Database のユーザー認証情報を Windows で一元管理することによって、Oracle Database でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がない。

外部プロシージャ (external procedures)

Oracle サーバー上で実行される PL/SQL ルーチンでは、C プログラミング言語で記述され、共有ライブラリに保存されている外部プロシージャまたはファンクションをコールできる。Oracle Database が外部プロシージャに接続するには、サーバーをネット・ワーク・サービス名で構成し、**リスナー**をプロトコル・アドレスおよびサービス情報で構成する必要がある。

簡易接続ネーミング (easy connect naming)

構成不要でクライアントによるデータベース・サーバーへの接続を可能にする**ネーミング・メソッド**。クライアントは、ホスト名とオプションのポート番号、サービス名およびインスタンス名から構成される簡単な TCP/IP アドレスを使用する。

```
CONNECT username/password@host[:port] [/service_name] [/instance_name]
```

グローバル・データベース名 (global database name)

データベースをネットワーク・ドメインの他のデータベースから一意に区別する完全データベース名。

例：

```
sales.us.acme.com
```

sales はデータベース名、us.acme.com はデータベースが置かれているネットワーク・ドメイン。

サービス登録 (service registration)

PMON プロセス (インスタンス・バックグラウンド・プロセス) がリスナーに情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、**listener.ora ファイル**はこの静的情報で構成される必要がない。

サービス登録により、リスナーには次の情報が提供される。

- データベースの実行中の各インスタンスのサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで使用可能なサービス・ハンドラ (ディスパッチャおよび専用サーバー)
これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく送信できる。
- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報
これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがふさがっている場合、リスナーはその接続専用のサーバーを生成することができる。

この情報により、リスナーはクライアントの接続要求を処理するための最良の方法を決定できる。

システム識別子 (system identifier)

「**SID**」を参照。

修飾されていない名前 (unqualified name)

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

接続記述子 (connect descriptor)

特別にフォーマットされた、ネットワーク接続のための宛先の記述。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

宛先サービスは、Oracle Database の場合はサービス名、リリース 8.0 またはバージョン 7 の Oracle データベースでは、Oracle システム識別子 (**SID**) を使用して表される。ネットワーク・ルートは、少なくとも、ネットワーク・アドレスを使用して**リスナー**の場所を示す。

接続識別子 (connect identifier)

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@connect_identifier
```

デフォルト・ドメイン (default domain)

ほとんどのクライアント要求が発生するネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド (naming method)

クライアント・アプリケーションで、データベース・サービスへの接続の際、接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Oracle Net Services は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名 (net service name)

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。

```
SQL> CONNECT username/password@net_service_name
```

必要に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- 各クライアントのローカル構成ファイル (tnsnames.ora)
- ディレクトリ・サーバー
- 外部ネーミング・サービス (Network Information Service (NIS)、セル・ディレクトリ・サービス (CDS) など)

汎用命名規則 (Universal Naming Convention: UNC)

汎用命名規則は、ネットワーク・ドライブをドライブ名にマップせずに、ネットワーク上のファイルにアクセスする手段を提供する。UNC 名は、次のように構成される。

```
¥¥computer name¥share name¥filename
```

標準構成 (typical configuration)

Oracle Database Client と Oracle Database 間の接続のデフォルト構成を実行する Oracle Universal Installer のオプション。次を構成する。

- **外部プロシージャ**への接続用に確立される、**tnsnames.ora** ファイル内の1つのネット・サービス名
- **sqlnet.ora** ファイル内の**ローカル・ネーミング**および**簡易接続ネーミング**・メソッド

Oracle Database Client が接続しようとする際、最初にローカル・ネーミングを使用し、次に簡易接続ネーミングを使用する。

プロセス間通信 (Interprocess Communication: IPC)

クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコルで、データベースとの通信のために**リスナー**と同じノードに置かれる。IPC は、TCP/IP より高速なローカル接続を提供する。

プロトコル・アドレス (protocol address)

ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者 (**リスナー**または **Oracle Connection Manager**) は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクトの位置に送信し、受信者はこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続受信者に対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

リスナー (listener)

サーバーに常駐するプロセスで、クライアントからの接続要求のリスニング、およびサーバーへの通信量の管理を行う。

クライアントがデータベース・サーバーとのネットワーク・セッションを要求するときに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナー情報と一致した場合、リスナーはデータベース・サーバーへの接続を許可する。

リポジトリ (repository)

Oracle Management Server からアクセス可能な Oracle データベースにある表の集合。Oracle Management Server では、すべてのシステム・データおよびアプリケーション・データ、環境全体に分散している管理対象ノードの状態についての情報、別にライセンスを受けられる管理パックに関する情報を格納するために、リポジトリが使用される。

ローカル・ネーミング (local naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決する **ネーミング・メソッド**。この名前は、各クライアントの **tnsnames.ora ファイル** に構成および保存される。

索引

A

AL32UTF8 キャラクタ・セット
アップグレード時の考慮事項, 2-6, C-3

C

clientadmin.jsp レスポンス・ファイル, B-3
clientcustom.jsp レスポンス・ファイル, B-3
clientruntime.jsp レスポンス・ファイル, B-3

D

DCE Adapter Support, 2-8
DVD ドライブ, インストール, 3-4

E

Entrust PKI Support, 2-8

F

Firefox Web ブラウザ, 2-9

I

installActions.log ファイル, D-2
Instant Client
 Instant Client Light
 言語およびキャラクタ・セットの要件, 2-6
 更新, 4-3
 構成, 4-3
 説明, 1-3
 データベースへの接続, 4-5
 LOCAL 環境変数, データベースへの接続, 4-6
 Oracle Call Interface によるデータベースへの接続,
 4-5
 Oracle Database への接続, 4-5
 TNS_ADMIN 環境変数, データベースへの接続, 4-6
 tnsnames.ora ファイルによる接続方法, 4-5
 インストール・タイプ, 1-3
 空の接続文字列, 4-6
 簡易接続ネーミング・メソッド, 4-5
 更新, 4-3
 説明, 1-3
 ディスク領域要件, 2-2
Instant Client Light
 言語およびキャラクタ・セットの要件, 2-6

更新, 4-3
構成, 4-3
説明, 1-3
ディスク領域要件, 2-2
データベースへの接続, 4-5

Instant Client とデータベースの接続に関する簡易接続
ネーミング・メソッド, 4-5

Instant Client の更新, 4-3

instantClient.jsp レスポンス・ファイル, B-3

「InstantClient」インストール・タイプ

非対話型インストール, B-3

レスポンス・ファイル, B-3

J

Java Access Bridge

JRE 1.4.2, A-2

インストール, A-2

構成, A-3

説明, A-2

Java Runtime Environment (JRE)

変更のガイドライン, 3-7

要件, 2-2

JRE, 「Java Runtime Environment (JRE)」を参照

L

listener.ora ファイル

Oracle Net Services の構成, 4-9

LOCAL 環境変数, 4-6

M

Microsoft Internet Explorer, 2-9

Microsoft レジストリ エディタ, 「レジストリ エディタ」
を参照

Mozilla Web ブラウザ, 2-9

MS-DOS モード, NLS_LANG パラメータの設定, C-6

N

nCipher Accelerator, 2-8

NetCA, 「Oracle Net コンフィギュレーション・アシス
タント (NetCA)」を参照

netca.jsp レスポンス・ファイル, B-3

Netscape Navigator, 2-9

Net コンフィギュレーション・アシスタント (NetCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の抑制,
B-6
NLS_LANG パラメータ, C-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの設定, C-6
地域およびキャラクタ・セットのデフォルト値, C-4
NTFS システム, ハード・ディスク領域要件, 2-2

O

Operfcfg.exe ユーティリティ, 4-8
ORA_NLS10 環境変数, 4-8
Oracle Administration Assistant for Windows, 3-3
Oracle Call Interface
Instant Client の接続方法, 4-5
「Instant Client」も参照
Oracle Counters for Windows Performance Monitor,
3-3, 4-8
Oracle Database
Instant Client への接続, 4-5
Oracle Database Client からの接続, 4-4
Oracle Database Client
インストールのガイドライン, 3-7
インストールの手順, 3-8, 3-9
インストール前の要件, 2-1
Oracle Database Client の削除
Oracle を PATH 環境変数から, 5-6
Oracle Enterprise Manager Java Console
実行, 4-7
リポジトリ・ユーザー権限, 4-7
Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザー権限,
4-7
Oracle Net Services
構成, 4-9
レジストリ エディタのキーの削除, 5-4
Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタント
(NetCA)
tnsnames.ora 構成, 4-4
インストール, 4-6
説明, 4-4
データベースへのクライアントの接続, 4-4
トラブルシューティング, D-3
非対話型インストール, B-3
レスポンス・ファイル, B-3
Oracle Objects for OLE, 3-3
Oracle Provider for OLE DB, 3-3
Oracle Services for Microsoft Transaction Server, 削除,
5-5
Oracle Technology Network (OTN)
アクセス, 3-6
ソフトウェアのダウンロード, 3-6
Oracle Universal Installer
異なる言語でのコンポーネントの実行, C-2
コンポーネントの削除, 5-2
様々な言語での実行, C-2
実行可能ファイルの場所, B-6
使用するリリース, 3-7
ソフトウェアの削除, ガイドライン, 5-2
ログ・ファイル, D-2
Oracle Universal Installer (OUI)
コマンドラインでの実行, B-6
Oracle Utilities
MS-DOS モードでの設定, C-6

Oracle Windows サービス, 停止, 5-2
ORACLE_OEM_CLASSPATH 環境変数, A-3
Oracle9i の言語および地域のサポート, 4-8
OracleMetaLink Web サイト, 2-7
Oracle サービス, 停止, 5-2
Oracle ソフトウェアの再インストール, 3-7
Oracle ディレクトリ, 削除, 5-6
Oracle ベース・ディレクトリ, 作成, 3-3
Oracle ホーム, 複数, 3-3
Oracle レジストリ・キー, 削除, 5-5
OTN, 「Oracle Technology Network」を参照
OUI, 「Oracle Universal Installer」を参照

P

PATH 環境変数
Oracle エントリの削除, 5-6

R

RAM
チェック, 2-3
要件, 2-2

S

Safari Web ブラウザ, 2-9
setup.exe, 「Oracle Universal Installer (OUI)」を参照
SQL*Plus
MS-DOS モードでの設定, C-6
Symantec pcAnywhere リモート・アクセス・ソフト
ウェア, 3-5

T

TEMP 環境変数, ハードウェア要件, 2-3
TMP 環境変数
ハードウェア要件, 2-3
tmp ディレクトリ
領域の解放, 2-3
領域のチェック, 2-3
TNS_ADMIN 環境変数, 4-6
tnsnames.ora ファイル
Instant Client とデータベースの接続, 4-5
Oracle Net Services の構成, 4-9

V

VNC リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-5

W

Web browser support, 2-9
Web ブラウザ
Firefox, 2-9
Microsoft Internet Explorer, 2-9
Mozilla, 2-9
Netscape Navigator, 2-9
Safari, 2-9
Windows Telnet サービスのサポート, 2-7
Windows XP, サポートされないコンポーネント, 2-8
Windows ターミナル サービス, サポートされないコン
ポーネント, 2-8

あ

アクセシビリティ・ソフトウェア, Java Access Bridge, A-1
アクセス権, Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザー権限, 4-7
アップグレード
AL32UTF8 キャラクタ・セット, 2-6, C-3
アップグレード, 「パッチ」を参照
アプリケーション, 空の接続文字列, 4-6

い

一時ディスク領域
解放, 2-3
チェック, 2-3
要件, 2-2
一時ディレクトリ, 2-3
インストール
DVD ドライブ, 3-4
Oracle Technology Network からのソフトウェアのダウンロード, 3-6
Oracle ベース・ディレクトリ, 3-3
Oracle ホーム, 複数, 3-3
インストール・ソフトウェアへのアクセス, 3-4 ~ 3-7
インストール前の考慮事項, 3-2 ~ 3-3
エラー, D-2
ガイドライン, 3-7
概要, 1-2
画面の非表示, B-6
既存の Oracle 製品がインストールされている場合, 3-3
サイレント・モードでのエラー処理, D-3
手順, 3-8 ~ 3-9
トラブルシューティング, D-1, D-4
非対話モードでのエラー処理, D-3
複数, 3-2
リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・インストール, 3-5
リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-4
レスポンス・ファイル, D-3
ログ・ファイル (対話型インストール), D-2
ログ・ファイル (非対話型インストール), D-3
インストール後の作業
Instant Client とデータベースの接続, 4-5
Oracle Database Client からデータベースへの接続, 4-4
Oracle Enterprise Manager Java Console 実行, 4-7
Oracle Enterprise Manager リポジトリ・ユーザー権限, 4-7
Oracle Net Services の構成, 4-9
Oracle9i の言語および地域のサポート, 4-8
推奨, 4-3 ~ 4-7
パッチのダウンロードおよびインストール, 4-2
必須, 4-2
ユーザー・アカウント, 4-6
インストール・ソフトウェア, アクセス, 3-4, 3-7
インストール・タイプ
Instant Client, 1-3
カスタム, 1-3
管理者, 1-3

説明, 1-3
ランタイム, 1-3
インストールのガイドライン, 3-7
インストール前の考慮事項, 3-2, 3-3

え

エラー
インストール, D-2
コンフィギュレーション・アシスタント, D-3
サイレント・モード, D-3
致命的, D-4
非対話型インストール, D-3

か

カウンタ, Oracle Counters for Windows Performance Monitor, 4-8
「カスタム」インストール・タイプ
説明, 1-3
データベースへの接続, 4-4
非対話型インストール, B-3
レスポンス・ファイル, B-3
空の接続文字列, 4-6
環境変数
LOCAL, 4-6
ORA_NLS10, 4-8
ORACLE_OEM_CLASSPATH, A-3
PATH, 5-6
TEMP と TMP
ハードウェア要件, 2-3
TNS_ADMIN, 4-6
「管理者」インストール・タイプ
Java Console のインストール, 4-7
サイレントまたは非対話型インストール, B-3
説明, 1-3
ディスク領域要件, 2-2
データベースへの接続, 4-4
レスポンス・ファイル, B-3

き

既存の Oracle インストール, 3-3
「基本インストール」方法
サイレントまたは非対話型インストール, B-4
記録モード, B-4

け

言語
Oracle9i をサポートするためのインストール後の手順, 4-8
異なる言語でのコンポーネントのインストール, C-2
異なる言語でのコンポーネントの使用, C-2

こ

コンフィギュレーション・アシスタント
サイレントまたは非対話型インストール時の抑制, B-6
トラブルシューティング, D-3
コンポーネント
Oracle Universal Installer を使用して削除, 5-3

異なる言語での使用, C-2
サポートされない
Windows Terminal Server, 2-8

な

サービス
停止, 5-2
サイレント・モード
「非対話モード」、「レスポンス・ファイル」も参照,
B-2
エラー処理, D-3
使用する理由, B-2
説明, B-2
削除
Oracle Database Client, 全体の手順, 5-1, 5-6
Oracle Database Client コンポーネントを手動で,
5-4 ~ 5-6
Oracle ディレクトリ, 5-6
コンポーネントを Oracle Universal Installer で, 5-3
「スタート」メニューの Oracle Database Client エン
トリ, 5-6
すべての Oracle レジストリ・キー, 5-5
レジストリ エディタの Oracle Net Services キー, 5-4
レジストリ エディタの Oracle キー, 5-4
レジストリ エディタのキー, 5-4
レスポンス・ファイルを使用, B-6
サポートされないコンポーネント
Windows Terminal Server, 2-8
Windows XP の場合, 2-8

し

自動ストレージ管理 (ASM)
サイレントまたは非対話モード・インストール, B-3

す

「スタート」メニュー, Oracle Database Client エントリ
の削除, 5-6
スワップ領域
チェック, 2-3
要件, 2-2

せ

製品インストール後の作業, Oracle Net Services の構成,
4-9

そ

ソフトウェア
要件, 2-4
ソフトウェア, 削除, 5-1, 5-6

ち

致命的エラー, D-4

て

ディスク領域
チェック, 2-3

要件, 2-2
ディレクトリ, Oracle Database Client の削除, 5-6
データベース
削除, 5-1 ~ 5-6
接続, 4-4
データベース・コンフィギュレーション・アシスタント
(DBCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の抑制,
B-6
データベースへの接続, 4-4

と

トラブルシューティング, D-1 ~ D-4
インベントリ・ログ・ファイル, D-2

は

ハードウェア要件, 2-2
ハード・ディスク領域
チェック, 2-3
要件, 2-2
パッチ
インストール後の作業, 4-2
ダウンロードおよびインストール, 4-2
バッチ・モード, NLS_LANG パラメータの設定, C-6

ひ

非対話型インストール
エラー, D-3
非対話モード
「レスポンス・ファイル」、「サイレント・モード」も
参照, B-2
エラー処理, D-3
使用する理由, B-2
説明, B-2

ふ

ファイル, Oracle Universal Installer ログ・ファイル,
D-2
物理 RAM
チェック, 2-3
要件, 2-2

へ

ページング・ファイル・サイズ
チェック, 2-3
要件, 2-2

め

メモリー
チェック, 2-3
要件, 2-2

ゆ

ユーザー・アカウント, 4-6

よ

要件

- Java Runtime Environment, 2-2
- Web browser support, 2-9
- Windows XP
 - サポートされるコンポーネント, 2-8
- ソフトウェア, 2-4
- ハードウェア, 2-2
- ハード・ディスク領域, 2-2

要件, Oracle Database Client, 2-1
抑制モード, 「非対話モード」を参照

ら

「ランタイム」インストール・タイプ

- 説明, 1-3
- ディスク領域要件, 2-2
- データベースへの接続, 4-4
- 非対話型インストール, B-3
- レスポンス・ファイル, B-3

り

- リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-5
- リモート・インストール
 - DVD ドライブ, 3-4
 - 説明, 3-5
- リリース・ノート, 1-2

れ

レジストリ エディタ

- Oracle Net Services キーの削除, 5-4
- すべての Oracle キーの削除, 5-5

レスポンス・ファイル

- Oracle Universal Installer での指定, B-5
- 一般的な手順, B-3
- エラー処理, D-3
- 記録モード, B-4
- コマンドラインでの値の引渡し, B-2
- 作成
 - 記録モードによる方法, B-4
 - テンプレートによる方法, B-3
- 自動ストレージ管理 (ASM), B-3
- 説明, B-2
- 「サイレント・モード」、 「非対話モード」も参照, B-2

ろ

ログ・ファイル

- インストール・セッションの確認, D-2
- エラーが発生した場合, D-2
- 対話型, D-2
- 非対話型, D-3

